

土佐日記讀本  
全

特45-232口

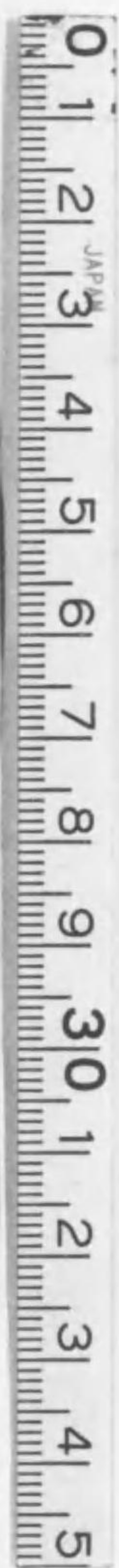


\*1200800203890\*



特

2



始





落合直文校閱

土佐日記讀本

東京 明治書院

特45 特22  
232 544

土佐日記讀本

男もすこいふ日記といふものを、女も、志てみむとてするなり  
その年の節述の二十日あまり、ひこ日の日の戌の時に門出す。

のよし、いさゝか物に書き付く。

ある人あがたの四とせ五とせ果てて、例の事ども、皆志をへて、解  
由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれ、こ  
れ、知る、知らぬ、送りす。年ごろ、よく具しつる人々なむ、別れ難く思  
ひて、頬に、ごかくしつゝ、のゝしる中に、夜ふけぬ。

廿二日、和泉の國まで、たひらかに、願ひ立つ。藤原の言實、船路な  
れど、うまの餞す。上、中、下、酔ひ過ぎて、いとあやしく、志ほ海のほご

明治  
39 4 16  
内交



りにて、あざれ合へり。

廿三日、八木の康教といふ人あり、この人、國に、必ずしも出でつかはるゝ人にもあらざりき。これぞ、正しきやうにて、うまのはなむけをたる。かみがらにやあらむ、國人の心の常として、今はこて、見えざるを、心あるものは、はちずになむ來ける。これは、物によりて、ほむるにしもあらず。

廿四日、講師、うまの饒志に、いでませり。ありとある、上、下、わらはまで、酔ひしれて、ひと文字をだに知らぬものしが、足は、十文字に踏みてぞ遊ぶ。

廿五日、かみの館より、呼びに、文もて來れり。よはれていき、て、日ひとひ、夜ひとよ、ごかく遊ぶやうにて、明けにけり。

廿六日、なほ、かみの館にあるに、あるじしのゝしりて、をのこらま

でに、物かづけたり。からうた、聲あげていひけり。やまごうた、あるじも、まらうごも、こと人も、いひあへり。からうた、これには書かず、やまごうた、あるじのかみの、よめりける。

みやこ出でて、君に逢はむと、こしものを、

こしかひもなく、別れぬるかな。

とあむありければ、歸るさきのかみのよめる。

ゑろたへの浪路を遠く、往きかひて、

われに似べきは、たれならなくに。

こご人々のも、ありけれご、さかしきも、なかるべし。ごかくいひて、さきのかみも、今のも、もろともにおりて、さきのも、いまのも、手ごり交して、ゑひごごに、心よげなることとして、出でにけり。

廿七日、大津より、浦戸をさして、漕ぎ出づ。かくあるうちに、京にて



生れしをむなご、こゝにして、俄にうせにしかば、この頃の出て立  
ち、いそぎを見れど、何事も、え言はず、京へ歸るに、をむなごのなき  
のみぞ、悲み戀ふる。人々も、え堪へず。このあひだに、ある人の、書き  
て出せる歌。

みやこへご、思ふも物の、悲しきは、

かへらぬ人の、あればなりけり。

また、あるごきには、

あるものと、忘れつゝ、なほ、あき人を、

いづらご問ふぞ、悲しかりける。

さいひけるあひだに、鹿兒の崎さいふ所に到るに、かみのはらか  
ら、又ご人、これかれ、酒を、ごもて追ひきて、磯におりゐて、別れが  
たきことをいふ。かみの館の人々の中に、このきたる人々、心あ

るやうには、言はれほのめく。かく、別れがたくいひて、かの人々の、  
口綱も、もろ持にて、この海へにて、にかひ出せる歌。

をしと思ふ、人やとまるご、あし鴨の、

うちむれてこそ、我は來にけれ。

といひて、ありければ、いごいたくめでて、往く人の、よめりける。

棹させど、底ひも知らぬ、わたつみの、

ふかきこゝろを、君に見るかか。

さいふあひだに、楫取、もののあはれも知らで、おのれし、酒をくら  
ひつれば、早くいなむとて、潮みちぬ、風も吹きぬべしと、さわげば、  
舟に乗りなむとす。この折に、ある人々、折ふしにつけて、からうた  
ごも、時に似つかはしきをいふ。またある人、西の國なれど、甲斐歌  
なご謠ふ。かくうたふに、ふなやかたの塵も散り、空ゆく雲も、たゞ



よひぬとぞ、いふなる。こよひ、浦戸にこまる。藤原の言實、橘の季衡、  
こころ人々、追ひ來たり。

廿八日、浦戸より漕ぎ出でて、大湊を追ふ。このあひたにはやくの  
かみの子、山口の千岑、酒よき物ごも、もてきて、船に入れたり、行く  
行く、飲み食ふ。

廿九日、大湊にとまれり、くすし、ふりはへて、屠蘇、白散、酒加へても  
て來たり、志あるに似たり。

元日、なほ、おなじごまりなり。白散を、あるもの、夜のまとて、ふあや  
かたに、さしはさめりければ、風に吹きさらさせて、海に入れて、え  
飲まずなりぬ、芋も、あらめも、齒がためもなし。かうやうの物も、な  
き國なり。もごめしも、おかず。たゞ、押點の口をのみぞ吸ふ。この吸  
ふ人々の口を、押點、もし、思ふやうあらむや。けふは、みやこのみぞ、

おもひやらる。こへの門のしりくめ繩の、なよしのかしら、ひよ  
ら木ら、いかに、ごぞ、いひあへる。

二日、なほ、大湊に、とまれり。講師、物、酒、おこせたり。

三日、おなじ所なり。もし、風波の、まばしご、惜むこ、ろやあらむ、こ  
ろもごなし。

四日、風ふけば、え出でた、ず。昌連、酒、よきもの、たいまつれり。かう  
やうのもの、もてくる人に、なほしもえあらで、いさ、げわざせさ  
する物もなし。にぎは、しきやうなれご、まくるこ、あす。

五日、風波やまねば、猶、おなじところにあり。人々、たえず、ごぶらひ  
にく。

六日、きのふのごとし。

七日になりぬ。おなじ湊にあり。けふは、青馬を、ご思へご、かひなし。



たゞ波の、白きのみぞ、見ゆる。かゝるあひだに、人の家の、池こ名ある  
 ところより、鯉はなくて、鮒より始めて、川のも、海のも、ここのも  
 も、長櫃に擔ひつゞけて、おこせたり。若菜、籠に入れて、雉をぞ、花に  
 つけたり。若菜ぞ、けふを知らせたる。歌あり、その歌。

浅茅生の野へにしあれば、水もあき、

池につみつる、若菜なりけり。

いと、をかしかし。この池こいふは、所の名なり。よき人の、男につき  
 て、下りて、住みけるありけり。この長櫃のものは、みな人、わらはま  
 でに、くれたれば、飽きみちて、舟子どもは、腹鼓をうちて、海をさへ  
 驚かして、波をも、たてつべし。かくて、このあひだに、事多かりけり。  
 破籠もたせて、來たる人、その名、なごぞや、今思ひ出でむ。この人、歌  
 よまむと、思ふ心ありて、なりけり。こかくいひいひて、波の立つな

るこごこ、憂へ言ひて、よめるうた。

ゆくさきに、たつ白波の、聲よりも、

おくれてなかむ、我やまさらむ。

さぞよめる。いと、大ごゑなるべし。もてきたるものよりは、歌は、い  
 かゞあらむ。この歌を、これかれ、あはれがれごも、ひとりも、返しせ  
 ず、あつべき人も、まじれ、ご、これをのみいたがり、ものをのみ食  
 ひて、夜ふけぬ。この歌ぬし、またまからず、ごいひて、立ちぬ。ある人  
 の子の、わらはなる、ひそかに言ふ。まろ、この歌の返しせむ。ごいふ。  
 おごろきて、いとをかしかし。ごかな。よみてむや。は。よみつべくば、  
 はや言へかし。ごいふに、まからず。ごいひて、立ちぬ。人を待ちて、  
 よまむ。ごて、もごめけるを、夜ふけぬ。ごにやあらむ。やがて、いにけ  
 り。そもそも、いかゞよみたると、いぶかしがりて問ふ。このわらは、



きすがに耻ぢていはず強ひて問へば、いへる歌。

ゆく人も、ごまるも、袖のなみだ川。

みぎはのみこそ、ぬれまさりけれ。

さなむよめる、かくは、いふものか、うつくしければにやあらむ、い  
ご、おもはずなり、わらは言にては、何かはせむ、おむを、おきなを、  
あつべし、あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらばやらむとて  
おかれぬめり。

八日、さほるここありて、なほ、おなじ所なり、こよひの月は、海にぞ  
入る、これを見て、業平の君の、山の端にけて、入れずもあらなむと  
いふ歌なむ、おぼゆる、もし、海べにてよままし、かば、波たちさへて、  
入れずもあらなむと、よみてましや、今、この歌を思ひ出でて、ある  
人のよめりける。

てる月の、ながる、見れば、天の川、

いづるみかとは、海にざりける。

とや。

九日、つごめて、大湊より、那波のとまりを追はむとて、漕ぎ出でけ  
り、これかれ、たがひに、國のさかひの内はとて、見送りに來る人、あ  
またが中に、藤原の言實、橘の季衡、長谷部の行政らなむ、御館より  
出でたまひし日より、こゝかしこに追ひ來る、この人々ぞ、志ある  
人なりける、この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし、これ  
より、今は漕ぎはなれて行く、これを見送らむとてぞ、この人ごも  
は、追ひきける、かくて、漕ぎゆくまにまに、海のほとりにとゞまる  
人も、遠くなりぬ、船の人も、見ぬずなりぬ、岸にも言ふことあるべ  
し、船にも思ふことあれど、かひなし、かゝれどこの歌を、ひごり言



にしてやみぬ。

思ひやる、ころは海を、わたれども、

ふみしなれば、知らずやあるらむ。

かくて、宇多の松原を、行き過ぐ。その松の數、いくそばく、いく千こせ經たりと、知らずも。ごごと、浪うちよせ、枝ごごに、鶴ごごびかふ。おもしろしと見るに、たへずして、船人のよめる歌。

みわたせば、松のうれごごに、すむ鶴は、

千代のごちごご、おもふべらなる。

こや、この歌は、所を見るに、えまさらず。かくあるを見つゝ、漕ぎ行くまに、まに、山も海も、みな暮れ、夜ふけて、にしひむがしも見えずして、てけのこご、楫取の心に、任せつ。をのこもならはぬは、いと、心細し。まして、女は、船底に、かしらを、つきあてゝ、ねをのみぞ泣く。か

く思へど、船子、楫取は、船歌うたひて、なにこも思へらず。その謠ふ歌は、

春の野にてぞ、ねをば泣く。わかすゝきにて、手をきるきる、摘んだる菜を、親やまぼるらむ。あうごめや食ふらむ。かへらや、よんべのうなるもがな。せに乞はむ。よんべの菜を、そらごごをして、おぎのりわざをして、せにも持てこず。おのれだにこず。

これならず、多かれど、書かず。これらを、人の笑ふを聞きて、海は、荒るれど、心は、すこし和ぎぬ。かく行き暮して、ごまりにいたりて、おきな人ひさり、たうめひさり、あるが中に、心地あしくして、物も、ものし給は、で、ひそまりぬ。

十日、けふは、この那波のごまりに、とまりぬ。



十一日、あかつきに船を出して、室津を追ふ。人みな、まだねたれば、海のありさまも見えず。ただ、月を見てぞ、西ひむがしをば、知りける。かゝるあひだにみな夜あけて、手あらひ、例の事ごもして、晝になりぬ。いまし、はねさいふごころに來ぬ。若きわらは、この所の名をきゝて、はねさいふ所は、鳥のはねのやうにやあるさいふ。また、幼きわらはのこそなれば、人々笑ふごきに、ありける女のわらはなむ、この歌をよめる。

まここにや、名にきくごころは、はねならば、

こぶが如くに、みやこへもがな。

こぞいへる、男も女も、いかで、疾く、みやこへもがなと、思ふ心あれば、この歌よしごにはあらねど、げにぞ思ひて、人々わすれず。このはねといふ所さふ、童のついでに、また、昔の人を思ひいでて、いつ

れの時にか、わするゝ。げふは、まして、母の悲むごころは、くだりし時の、人の數たらねば、ふるき歌に、かすはたらでぞ、かへるべらなる、さいふごころを、思ひいでて、人のよめる。

世の中に、思ひあれども、子を戀ふる、

おもひにまさる、おもひなきかな。

といひつゝなむ。

十二日、雨ふらず。文時、維茂が、船のおくれたりし、鳴し津より、室津に着きぬ。

十三日、あかつきに、いさゝか、雨ふる。若ばしありて、やみぬ。男女、これかれ、湯あみなごせむとて、あたりの、よろしき所におりて行く。海をみやれば、

雲もみな、波ごぞ見ゆる。あまもがな。



いづれか海と問ひて知るべく。

一六

となむ歌よめる。さて十日あまりなれば、月おもしろし。(下略)

十四日、曉より雨ふれば、おなじ所にとまれり。船君、せちみす。さうじ物なければ、午のときより後に、楫取のきのふ釣りたりし鯛に、ぜになければ、米をとりかけて、おちられぬ。かゝること、多くありぬ。楫取、又鯛もてきたり。米、酒なごくる。楫取、けしきあしからず。十五日、けふ、小豆粥にずくち惜しく、なほ、日のあしければ、ゐざるほごにぞ、けふ、廿日あまり経ぬ。いたづらに、目をふれば、人々、海を眺めつゝある。女の童のいへる。

たてば立ち、おればまたある。吹く風と、

波とは、思ふごちにやあるらむ。

いふかひなきものの、いへるには、いとにつかはし。

十六日、風波やまねば、なほおなじ所にとまれり。たゞ、海に波なくして、いつしか、御崎といふ所、わたらむとのみなむ思ふを、風浪、ともにやむべくもあらず。ある人の、この波のたつを見て、よめる歌。

霜だにも、おかぬかたうと、いふなれど、

波のなかには、雪ぞ降りける。

さて、船に乗りし日より、けふまでに、廿日あまり、五日になりけり。

十七日、曇れる雲なくなりて、あかつきづく夜、いとおもしろければ、船を出して、漕ぎ行く。このあひだに、雲の上も、海の底も、おなじごとくにあむ、ありける。うへも、昔のをのこは、棹は穿つ波の上の月を、船は襲ふ海の中のそらを、とはいひけむ。きゝざしに、きけるなり。また、ある人の、よめる。

一七



みなぞこの月の上より漕ぐ船の、

一八

棹にさはるは桂なるらむ。

これを聞きて、ある人の、またよめる。

かけ見れば、波のそこなる、ひさ方の、

空こぎわたる、我ぞわびしき。

かくいふあひだに、夜やうやく明けゆくに、楫取ら、黒き雲にはかに、出できぬ。風も吹きぬべし。御船、かへしてむといひて、かへる。このあひだに、雨ふりぬ。いとわびし。

十八日。なほ、おなじ所にあり。海あらければ、船いださず。このごまき、遠く見れども、近く見れども、いとおもしろし。かゝれども、苦しければ、何事もおぼえず。男ごちは、心やりにやあらむ、からうたなど、いふべし。船も出さで、いたづらなれば、ある人の、よめる。

いそぶりの、よする磯には、年月を、

いつともわかぬ、雪のみぞふる。

この歌は、常にせぬ人のことなり。また、ある人の、よめる。

風による、波の磯には、うくひすも、

春もえ知らぬ、花のみぞさく。

この歌どもを、すこしよろしき聞きて、船のをさしける翁、月頃のくるしき心やりに、よめる。

たつ波を、雪か花か、吹く風ぞ、

よせつゝ人を、はかるべらなる。

この歌どもを、人の、何かさいふを、ある人の、また、きゝふけりてよめる。その歌、よめる文字、みそ文字あまり七文字。人みな、えあらで、わらふやうなり。歌ぬし、いと、氣色あしくて、ゑますまねべども、え

一九



まねばず書けりとも、え讀みあへ難かるべし。けふだに、かくいひ  
 がたしまして、後にはいかならむ。

十九日、日あしければ、船いださず。

二十日、きのふのやうなれば、船いださず。みな人々、うれへ歎く。く  
 るしく心もこなければ、たゞ、日のへぬる數を、けふいくか、二十日、  
 三十日、さかぞふれば、およびも、そこなはれぬべし。よるは、いもね  
 ず、いとわびし。廿日の夜の月、出でにけり。山の端もなく、海の中  
 よりぞ、いでくる。かうやうなるを見てや、むかし、安倍の仲麿とい  
 ひける人は、もろこしに渡りて、歸り來るときに、船に乗るべき所  
 にて、かの國人、うまのはなむけし。別れ惜みて、かしこのからうた、  
 つくりなどしける。あかずやありけむ。廿日の夜の月、いつるまで  
 ぞ、ありける。その月は、海よりぞ、いでける。これを見て、仲麿のぬし、

我が國には、かゝる歌をなむ。神代より、神もよみたび、今は上、中、下  
 の人も、かうやうに、別をしみ、喜もあり、悲もある。時にはよむとて、  
 よめりける歌。

青海原、ふりさけみれば、春日なる、

御笠の山に、出でし月かも。

とぞよめりける。かの國人、きゝしるまじうおぼえたれど、事の心  
 を、をとこ文字に、さまを書き出して、こゝのことはつたへたる人  
 に言ひ知らせければ、こゝろをや聞き得たりけむ。いとおもひの  
 外になむめでける。もろこしと、この國とは、ことは異あれど、月の  
 かげは同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さ  
 て、今、そのかみを想ひやりて、ある人のよめる歌。

都にて、山の端に見し、月なれど。



海より出でて、海にこそ入れ。

三

廿一日、卯のときばかりに船出す。みな人々の船出づ。これを見れば、春の海に、秋の木の葉しも散れるやうにうありける。おぼろげの願によりてにやあらむ。風も吹かず、吉き日いできて、漕ぎ行く。このあひだに、つかはれむとて、つきてくる童あり。それが謠ふ船うた、

なほこそ、國の方は、見やらるれ。

わが父母ありと思へば、かへらや、

とうたふうあはれなる。かく謠ふを聞きつゝ、漕ぎくるに、くろごりといふ鳥、巖の上に集り居り。その巖のもとに、浪しるく打ち寄す。楫取のいふやう、くろごりのもごに、しろき浪を寄すごういふ。この詞、なにとはなけれど、もの言ふやうにうきこえたる。人のほ

ごにあはねばごがむるなり。かく、いひつゝ、行くに、船君なる人、浪を見て、國よりはじめて、海賊むくいせむといふなることを思ふ。うへに、海の、また、おそろしければ、かしらも、皆白けぬ。な、そち、やそち、は、海にあるものなりけり。

わがかみの、雪と磯邊の、しらなみと、

いづれまされり、沖つ島守。

楫取いへ。

廿二日、夜べのとまりより、ここどまりを追ひてう行く。遙に、山見ゆ。年九つばありなるをの童、年よりはをさなくうある。この童、船を漕ぐまにまに、山も行く。こ見ゆるを見て、あやしき歌をうよめる。その歌、

漕きて行く、船にて見れば、あしびきの、

三



山さへ行くを、松は知らずや。

どろいへる。をさなき童のここにてはにつかはしけふ海あらけ、  
磯に、雪ふり、波の花さけりある人のよめる、

浪ごのみ、ひとへに聞けご、色みれば、

雪ご花ごに、まがひぬるかな。

廿三日、日てりて、くもりぬ。このわたり、海賊のおそれありといへば、かみほとけをいのる。

廿四日、きのふの、おなじ所なり

廿五日、楫取らの北風あしといへば、船いださず。海賊追ひくといふこと、たえずきこゆ。

廿六日、まことにやあらむ、海賊追ふといへば、夜なかばかりより船を出して、漕ぎくる路に、手向する所あり。楫取して、ぬきたてま。

つらするに、ぬさの、ひむがしへ散れば、楫取の申して、たてまつることは、このぬさの散る方に、御船、すみやかに漕がめしたまへごまをして、たてまつるを聞きて、ある童のよめる、

わたつみの、ちぶりの神に、手向する、

ぬさの追ひ風、やまず吹かなむ。

ごうよめる。このあひだに、風よければ、楫取、いたく誇りて、船に帆あげよなごよろこぶ。その音を聞きて、童も、おむなも、いつしかごし思へばにやあらむ、いたくよろこぶ。この中に、淡路のたうめといふ人のよめる歌、

追ひ風の、吹きぬる時は、行くふねの、

ほでうちてこそ、うれしかりけれ。

さう、ていけのことにつけていへる。



廿七日、風ふき、浪あらければ、船いださず、これかれ、かしこく歎く、  
をここたちの、心なぐさめに、からうたに、日をのうめば、都遠しな  
ご、いふなること、のさまをききて、ある女のよめる歌、

口をだにも、天雲ちかく、見るものを、

みやこへごおもふ、道のはるけさ、

また、ある人のよめる

吹く風の、たえぬかぎりし、立ちくれば、

波路はいとご、はるけかりけり、

日ひこ日、風やまず、つまはじきして、寝ぬ、

廿八日、よもすがら、雨やまず、けさも、

廿九日、船いだして行く、日、うらうらご照りて、こぎ行く、爪の、いと  
長くなり、にたるを見て、日をかぞふれば、けふは、子の日なりけれ

ば、きらず、むつきなれば、京の子の日の、こごいひ出でて、小松もが  
なごいへご、海なかなれば、難しかし、ある女のかきて出せる歌、

おぼつかな、けふは子の日か、あまからば、

うみまつをだに、ひかましものを、

とぞ、いへる、海にて、子の日の歌にては、いかゞあらむ、また、ある人  
のよめる歌、

けふなれど、若菜もつまず、春日野の、

わがこぎわたる、浦になければ、

かくいひつゝ、こぎ行く、おもしろき所に、船を寄せて、こゝやいづ  
こと問ひければ、土佐のとまりごぞいひける、むかし、土佐ごいひ  
ける所に、住みける女、この船にまじれりけり、それがいひけらく、  
むかし、暫しありし所の、名たくひにぞあなる、あはれごいひて、よ



める歌、

年ごろを、住みし所の、名にしおへば、

さぞ、いへる。

きよる浪をも、あはれこそみる。

三十日雨風ふかず、海賊夜ありきせざなりと聞きて、夜なかばかりに、船をいたして、阿波のみこを渡る。夜あかれば、西東も見えず。をとこ、女、からく、神ほとけを祈りて、このみとを渡りぬ。寅卯の時ばかりに、野鳥といふ所を過ぎて、田無川といふ所をわたる。からく急ぎて、和泉の灘といふ所にいたりぬ。けふ、海に、波に似たる物なし。神ほとけの惠蒙れるに似たり。けふ、船に乗りし日より、かぞふれば、みそかあまり、九日にかりにけり。今は、和泉の國に來ぬれば、海賊ものならず。

二月朔日、あしたのま、雨ふる。午の時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ所より出でて、漕ぎ行く。海の上、きのふのごとくに、風浪見えず。黒崎の松原を経て行く。ところの名は黒く、松の色は青く、磯の浪は、雪のごとくに白く、貝の色は蘇枋にて、五色に、今、ひと色ぞ足らぬ。このあひだに、けふは、箱の浦といふ所より、綱手ひきて行く。かく、行くあひだに、ある人のよめる歌。

玉くしげ、箱の浦なみ、たたぬ日は、

海をかゞみこ、誰か見ざらむ。

また、船君のいはく、この月までなりぬることとて、歎きて、苦しきに堪へずして、人もいふこととて、こゝろやりにいへる歌。

ひく船の、つあでの長き、春の日を、

よそかいかまで、われは經にけり。



聞く人の思へるやうなぞ、たゞ言なると、ひそかに言ふべし。船君の、からくして、ひねり出して、善しと思へることを、得しもこそあへさて、さゝめきて、やみぬ。俄に、風波高ければ、ごままりぬ。

二日、雨風やまず、ひご日、夜すがら、神ほごけを祈る。

三日、海のうへ、きのふのやうなれば、船いださず、風の吹くこそやまねば、岸の浪、たちかへる。これにつけてよめる歌、

緒をよりて、かひなきものは、落ちつもる。

なみだの玉を、ぬかぬなりけり。

かくて、けふも暮れぬ。

四日、楫取、けふ、風雲のけしき、甚だ悪し。ごいひて、船いださずなりぬ。あかれごも、ひねもすに、浪かぜ立たず、この楫取は、日も得はからぬかたゐなりけり。このごまりの濱には、くさぐさのうるはし

き貝、石など、おほかり。かゝれば、たゞ、昔の人をのみ戀ひつゝ、船なる人のよめる、

よする波、うちも寄せなむ。我が戀ふる、

人わすれ貝、おりてひろはむ。

ごいへれば、ある人の堪へずして、船のこゝろやりによめる、

わすれ貝、ひろひしもせじ。あら玉を、

戀ふるをだにも、かたみごおもはむ。

ごなむいへる。をむなごのためには、親をさなくなりぬべし。玉ならずもありけむを、人いはむや。されども、死にし兒、顔よかりきといふやうもあり。猶、おなじ所に、日を経ることを歎きて、ある女のよめる歌、

手をひでて、さむさも知らぬ、いづみにぞ、



くむとはなしに、日ごろへにける。

五日、けふ、からくして、和泉の灘より、小津のこまりを追ふ。松原、日もはるく、なり。これかれ、くるしければ、よめる歌、

行けごなほ、行きやられぬは、いもがうむ、

小津のうらなる、岸のまつ原、

かくいひつゝ、くるほごに、船疾く漕げ、日のよきにご催せば、楫取船子共にいはく、御船より、仰せたぶなり。朝北の、出て來ぬさきに、綱手はや引けさいふ。この詞の、歌のやうなるは、楫取の、おのづからの詞なり。かちとりは、うつたへに、われ、歌のやうなることいふ。さにもあらず、聞く人の、あやしく、歌めきて、もいへるかなとて、書き出せば、げにも、三十文字あまりなりけり。けふ、浪な立ちそと、人々、ひねもすに祈るしありて、風浪たゞず。今し、かもめ群れ

ゐて、遊ぶ所あり。京の近づく喜のあまりに、ある童のよめる、

祈りくる、かざまご思ふを、あやなくも、

かもめさへだに、浪ご見ゆらむ、

ごいひて行くあひだに、石津ごいふ所の松原おもしろくて、濱邊ごほし。また、住吉のわたりを漕ぎ行く。ある人のよめる、

いま見てぞ、身をば知りぬる。住の江の、

松よりさきに、われは經にけり、

こゝに、昔つ人の母、ひと日、かた時も忘れねばよめる、

住の江に、船さしよせよ、忘れ草、

しるしありやと、摘みて行くべく、

こなむ、うつたへに忘れなむごにはあらで、戀しき心地、しばし、息めて、またも、戀ふる力にせむごなるべし。かくいひて、ながめつゝ、



くるあひだに、ゆくりなく、風ふきて、漕げども漕げども、しりへ、し  
ぞきにしぞきて、ほこほとしく打はめつへし、楫取のいはく、この  
住吉の明神は、例の神ぞかし、はしきものぞおはすらむとは、今め  
くものか、さて、ぬさをたてまつりたまへといふ、いふに従ひて、ぬ  
さたてまつる、かくたてまつれども、もはら風やまで、いやふきに、  
いやたちに、風浪のあやふければ、楫取、またいはく、ぬさには、御心  
のゆかねば、御船も行かぬなり、なほ、嬉しと思ひたまふべきもの  
たてまつり給へといふ、また、いふにしたがひて、いかゞはせむと  
て、まなこもこそ、二つあれ、唯一つある鏡をたてまつるとて、海に  
うちはめつれば、くちをし、されば、うちつけに、海は鏡のごこなり  
ぬれば、ある人のよめる歌、

ちはやぶる、神のこゝろを、荒るゝ海に、

鏡を入れて、かつ見つるかな、

いたく、住の江のわすれ草岸の姫松なごいふ神にはあらずかし、  
目もうつらうつら、鏡に、神の心をこそは見つれ、楫取のごこは、  
神の御心なりけり、

六日、みをつくしのもごより出でて、難波の津をきて、河尻に入る、  
みな人々、女をさなきもの、額に手を當てて、よろこぶこと、二つな  
し、かの船系ひの、淡路の島のおほいこ、みやこ近くなりぬといふ  
をよろこびて、船底より、頭をもたげて、かくぞいへる、

いつしかと、いふせかりつる、なにはがた、

あしこぎそけて、みふね來にけり、

いと思の外なる人のいへれば、人々あやしがる、これがなかに、心  
地なやむ船君、いたくめでて、船酔し給ひし御顔には似ずもある



かなごぞいひける。

七日。げふ川尻に、船入りたちて、漕ぎのぼるに、川の求ひて、なやみ  
わづらふ船ののぼること、いと難し。かゝるあひだに、船君の病者、  
もとより、こちこちしき人にて、かうやうのこと、さらに知らざり  
けり。かゝれども、淡路のたうめの歌にめでて、都ぼこりにもやあ  
らむ、からくして、あやしき歌ひねり出せり。その歌、

きこきては、川のほり江の水をあさみ、

舟もわが身も、なづむけふかな。

これは、病をすればよめるなるべし。ひごうたに、事のあかねば、今  
ひとつ、

とくと思ふ、船なまやすは、わが爲に、

水のこゝろの、浅きなるべし。

このうたは、都の近くなりぬる喜に堪へずして、いへるなるべし。  
淡路のごの歌に劣れり。ねたき、いはざらましも、をとくやしがり  
るうちに、よるになりて、ねにけり。

八日。なほ、川のほりになづみて、鳥養の御牧といふほとりにと、  
まる。こよひ、船君例の病おこりて、いたくなやむ。ある人、あざらか  
なるものもてきたり。よねして、かへりことす。をとごども、ひそか  
にいふなり。いひぼしても釣るとや、かうやうのこと、ごころごこ  
ろにあり。げふ、せちみすれば、いをもちあず。

九日。こゝろもとなきに、あけぬから、船を引きつゝ、上れども、川の  
水なければ、あざりにのみぞあざる。このあひだに、和田のこまり  
の、あがれのところといふ所あり。よね、いをなどこへば、おくりつ、  
かくて、船ひき上るに、渚の院といふ所を見つゝ、ゆく。その處、むか



しを思ひやりてみれば、おもしろかりける所なり。しりへなる岡には、松の木ごもあり。中の庭には、梅の花さけり。こゝに、人々のいはく、これ、昔、名だかくきこえたる所なり。惟喬の親王の御ともに、在原業平の中將の、世の中に、絶えて櫻の、さかざらば、春の心は、のどけからましといふ歌よめる所ありけり。いま興ある人、ところに似たる歌よめり。

千世へたる、松にはあれど、いにしへの、

こゑのさむさは、かはらざりけり。

また、ある人のよめる、

君こひて、世をふる宿の、梅の花、

むかしの香にぞ、なほにはひける。

といひてぞ、みやこの近づくをよろこびつゝ、のぼる。かくのぼる

人々のうちに、京よりくだりし時に、みな人、子どもなかりき。いたれりし國にてぞ、子うめるものごもありあへる。みな人、船のとまる所に、子を抱きつゝ、おりのぼりす。これを見て、むかしの子の母、かなまきにたへずして、

なかりしも、ありつゝ、かへる、人の子を、

ありしもなくて、くるがなしさ。

こいひてぞ泣きける。父も、これをきゝて、いかゞあらむ。かうやうのこと、歌このむごて、あるにしもあらざるべし。もろこしも、こゝも、思ふここに堪へぬ時のわざとか。こよひ、宇土野といふこころにこまる。

十日、さはることありて、のぼらず。

十一日、雨いさゝかふりて、やみぬ。かくて、さし上るに、東の方に、山



のよこをれるを見て、人に問へば、八幡の宮といふ、これをききて、よろこびて、人々をがみたてまつる。山崎の橋みゆうれしきこと、限なし。こゝに、相應寺のほとりに、しばし船をとごめて、とかくさだむることあり。この寺の岸のほとりに、柳おほくあり。ある人、この柳のかげの、川のそこにうつれるを見て、よめる歌、

さぐれなみ、よするあやをば、あをやぎの、

かげの絲して、織るかとぞみる。

十二日、山崎に、こまれり。

十三日、なほ、やまざきに。

十四日、雨ふる。げふ、車、京へとりやる。

十五日、げふ、車、あてきたれり。船のむづかしさに、船より、人の家に移る。この人の家、よろこべるやうにて、あるじしたり。このあるじ

の、また、あるじのよきをみるに、うたて思ほゆ。いろくゝに、かへりごとす。家の人のいでいり、にくげならず、あやゝかなり。

十六日、げふ、夕つかた、京へのぼるついでに見れば、山崎のたななる小櫃の繪も、まがりの法螺のかたもかはらざりけり。賣る、人の心をぞ知らぬとぞいふなる、かくて、京へゆくに、島坂にて、人、あるじしたり。かならずしも、あるまじきわざなり。立ちて往きしときよりは、くる時ぞ、人は、とかくありける。これにも、それにも、かへりごとす。

夜になして、みやこには入らむとおもへば、いそぎしもせぬほどに、月出でぬ。桂川、月のあかきにぞわたる。人々のいはく、この川、飛鳥川にもあらねば、淵瀬、更にかはらざりけりといひて、ある人のよめる歌、



久かたの月におひたる桂川、

四二

そこなるかけも、かはらざりけり。  
また、ある人のいへる、

あまぐもの、はるかなりつる、桂川、

袖をひでて、わたりぬるかな

また、ある人のよめる、

桂川、わが心にも、かよはねど、

おなじふかさに、流るべらなり。

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜ふけてくれば、ごころどころも見えず。京に入りたちて、うれし家にいたりて、門に入るに、月あかければ、いごよく、ありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれやぶれたる。家をあづけたりつる人の

心もあれたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて、あづかれるなり。されば、たよりごころに、物もたえず、得させたる。こよひ、かゝること、聲高にも、ものいはず。いと、は、つらく見ゆれど、心ざしはせむさす。さて、池めいて、くぼまり、水づける所あり。ほとりに、松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけむ。片枝はなくなり、にけり。いま生ひたるぞまじれる。大かた、皆あれにたれば、あはれこそ、人々いふ。思ひ出でぬ事なく、おもひこひしきがうちに、この家にて、生れし女子の、諸共にかへらねば、いかゞはかなしき。船人も、皆、子いできて、のゝしる。かゝるうちに、なほ、かなしみにたへずして、ひそかに、心しれる人ごいへりける歌、

うまれしも、かへらぬものを、わがやごに、

小松のあるを、見るがかなしき。

四三



とぞいへるなほ、あかずやありけむ、またなむ。

見し人を、松の千こせに、見ましかば、

とほくかなしき、別せましや。

わすれがたく、くちをしきこ多かれど、えつくさず。こまれかく  
まれ、ごくやりてむ。

## 土佐日記讀本終

## 土佐日記註釋

【一五】(この書の題號) 紀貫之、土佐の國司の任期はてて、京に飯る途中の日記なれば、かく名づけたり。土佐のにきと訓む。◎男もすといふ云々、してみむとてするなり 此時代の風として、日記は男子の作るものにて、しかも、文章は漢文を以て作れり。此日記は、貫之、わざと女の筆に托して書けるゆゑに、文章は、當時婦女子の間に行はれたる國文を以てし、男子も作るといふ日記といふものぞ、婦女子ながらも書き試みむと思ひて作るなりと斷れり。男もすといふ「男もすなる」とかけ、其本もあり。何れにても文意に太差なし。してみむのみむは、試みむといふに、この意おなじ。此一節は、此日記の緒言とも總序とも見るべし。◎うれの年 某の年なり。實は承平四年なり。◎師走の云々 十二月の二十一日初更の時に出立すとなり。土佐の國なる館舎を立ち出づるなり。一日の日と重ねたるは、古きいひざまなり。戌の時は、午後八時より十時までの間をいふ。一本には、「一日の戌の時」とのみあり。さて、國司の館は土佐の長岡郡日吉村なりき。◎物にかいつくものは、ある物の名を、これと明示せずして、おほやうにいふ詞。こゝは紙をさして云へり。かいは書きの音便。このところは、日記の作者なる婦人自身の出立を明にするのみならず、紀氏の一行の出立せし日までをかけて云へるなり。◎ある人 紀氏をさす。◎あがたの云々 あがたは、縣の字をあつ。地方のことを云ふ。こゝは地方官の任期はててといふにひとし。四年五年は、國司交替の年期を、大



やうに云へるにて、實は滿四年の任期なり。○例の事ども 例もまた、或る事柄を、それと明示せずして、おほやうに云ふ詞あり。○こゝは國司交替の時に、必ずあるべき、いろ／＼の事務を云ふ。去をへては爲し竟りての義。○解由 解由状のことなり。解由状は、官税公事など、さまざまの事務を、濡りなく後任の國司に引き継げば、後任の國司より、その算勘滞りなきよしの引受証を、前任の國司に渡す、その引受証をいふ。○とりてうの解由状を受取りてあり。○船に乗るべき所 長岡郡の大津といふところあること、下文によりて明かなり。この一句にて、といふ助辭を四つまで重ねたるは、古文に多き例にて、古事記などにも見ゆ。○かれこれ云々 彼れこれ、知る人も知らぬ人も、紀氏の飯るを見送れりとなり。○年ころよく具しつる人々かむ云々 年來、よく召し使ひたる人々は、殊更わかれを惜みて、こやかくと頻に酒肴をぐも取り出し、彼れこれ騒ぎをる中に、その夜も更けたりとなり。なむは、他にくらべて重きをおく意味の係辭かり。なむといふ係あれば、思ふと結ぶべきを、てといふ接續辭を呼びて、次へ接續したり。のゝしるは、賑かに騒ぐこと。○和泉の國まで云云 京へ飯るなれど、海路の困難と、又このころ、海賊の多きことを思ひて、先づ和泉の國までの無事を立願するなり。たひらかに、無事にあれかしの意。○藤原言實 言實はトキザ子とよむ。土佐の國の人なるべし。○うまの餞 饗別といふに同じ意なり。語原は、古、人の旅行せむとするに、見送の人々、その旅行する人の乗れる馬の鼻を行先へ向けて、無事に行けよ、恙なく飯りこよかと祝へることありしより起れり。今はたゞ、「はなむけ」のみ云へり。こゝには、言實といふ人の、紀氏の一行を饗應して、送別の宴を張れることを云へり。陸にもあらぬ船路の出立なれど、馬のはなむけしたり

とは、作者の滑稽諧謔なり。○かみなかしも 紀氏以下一同の意。○酔ひ過ぎて 送別の馳走酒に酔過ぎたるなり。○いとあやしく 甚だ不思議になどいふ意。○あざれ 魚肉の腐爛するとなるが、こゝは、人々の亂雜に戯れ合ふことにかけて云へり。あざれは後世の洒落といふ詞におなじ。潮海のはごりにてあされあへりとは、魚は塩に漬ければ腐爛するものにあらず、然るに、不思議にも、人々の潮海のはごりにあされ合へりとは、例の諧謔に云へるなり。○八木の康教 八木は、康教は名。八木を一本には「山」とあり。○國に必ずしも云々 この人は、由緒ある人にて、國司などに自由につかはるゝ人にあらずとなり。○これぞ云々 この人は、殊に禮儀正しき餞別をなせりとの意。ぞといふ係辭は、なむとひとしく、他に比較して、一層重きをおく意味の助辭なり。○かみがらにやあらむ云々、耻ぢすなむさける かみは國司を云ふ。國司が他にすぐれてよき國司なりし故にやあらむ、地方の人の癖として、在任中は追従を云ひて集りくるも、今は任期もはて、歸るといふ時には、送りても來ず、影も見せぬものなるに、眞實のある人々は、さる薄情なる人には憚ることなく、こゝまで見送りくれたりとなり。薄情なる人の多き中に、おのれ一人、禮儀を重んじ、厚誼を盡すは、薄情なる人々に對して、却りて耻しきやうなるものなれば、それをも頓着せずは、からざるを恥ぢずといへるなり。かみがらにやあらむといふ句は、心あるものはの句の上に入れて讀み味ふべし。紀氏自身を褒めたるは、亦滑稽の一あり。かみがらを、土佐の國の神がらの意に釋くもあれど、まさらず。○これは物によりて云々 かくいふは、この人々より饗別に贈れる品のよきものあるが故にあらず、その人々の眞心に感じて云ふとあり。この句また多少の諧謔を含めり。○講師 中古の制、國ごとに國分寺



あり。國分寺の住職を講師と云ふ。こゝにあるは、土佐の國分寺の講師なり。○ありとある云々、踏みてぞあそぶ。そこにありあふ上下の人、又は童兒にいたるまで、講師が贈れる酒のために酔ひ載れ、一向に無學にて、一の字一つをだに知らぬものさへ、その足は十文字を踏みて興じあへりとなり。十文字は、酒に酔ひて千鳥足になるさまなり。一文字といへるに對し、十文字といへるなど、滑稽の筆おもしろしと云ふべし。一文字、十文字、ともに字音のまゝに讀むべし。ものしがは、ものがといふに、語勢を強めて、しといふ強辭を挾めるなり。○かみの館 國司の館舎なり。今は入替りて、新任の守の住めるあり。○日ひこひ夜ひこよ 一日一夜のことを、かくいひたなり。○ごかくあそぶやう ことやかくやして遊ぶやうにて、夜明に至れりとなり。やうの語面白し。ひたすら遊びしにあらず、惜別の情を叙ぶることも交れるを知るべし。○あるじし云々 今日もなほ新任國司の館にて饗應あり。賑かに騒ぎあひて、多くの郎等までに、品物などを呉れたりとなり。あるじは饗應のこと。をのこらはあまたの下部をいふ。かつげは人に物を與ふることなり。そは竹取物語の注釋中に説明しおけり。○からうた 詩を云ふ。○まらうご 客人にて、即ち紀氏の一行を云ふ。○いひあへり 歌を云ひあへりとは、今日になき詞づかひなり。歌をうたひ合へるを云ふ。○からうたは云々 作者は女のことゆゑ、詩の事は知らず。故に、此處には書かずとなり。○あるじの守のよめりける この下に、「歌」といふ詞はふかる。○都出でての歌 京を立ち出でて、君(紀氏)に逢はむと思ひて、この國に來りしものを、來りし甲斐もなく別るゝことかなとなり。○かへる前の守 紀氏をさす。○まろたへの歌 浪の上を往來して、我が如く旅中のかからきめを見給ふは誰ならむ。そは君なりとは生憎なること哉といふ

意なり。白妙は、浪の冠詞。袴布の白き色を白波に喩へたるなり。往きかひは、行き交ひあり。「似るべし」と云ふべきを似べきといふは略語、見るべきを見べきと云ふも同じ格なり。ならなくには反語。○こと人々のも 他の人々の歌もありけれど、その歌には、よき歌もなかるべしとなり。されば省きて書かずといふ意を含めたり。○今のも 今の守もなり。○おりて 館をおりて出づるなり。○ささのも今のも 今のあるじも、前のあるじもにて、上の、前の守も今のもとあると同じことを、二度かさねたるなり。○手とり交し 握手して別るゝなり。○あひごどに云々 あひごとは醉言なり。酔ひたる餘に、首途の祝などの心持よきことをして館を出づるなり。○大津、浦戸 大津は長岡郡、浦戸は吾川郡なり。○かくある中に かく出立の際にといふ意。○京にて生れしをんなむ云々 京にて生みたる紀氏の女ありしが、この國在任中に、俄なる病にて亡くなりしが、今出立に臨み、いろいろ飯京の用意など忙しけれど、その子を伴ひ歸らざることを憶ひ出し、取るものも手につかず、物さへ云はぬほど悲しとなり。この日記は、女子の亡くなりし悲を経とし、途中の滑稽を緯として書けるものなれば、この女子のことは、おろそかに見るべからず。○ある人々もえ堪へず かたはらにある人々も、紀氏夫婦の意中を想像して、悲しさに堪へずとあり。○都へどの歌 都へ歸らむと思ひ立つ時は嬉しきものあるに、却つて物悲しく思はるゝは、初めつれて來りし子の、この國に死にて、共につれ歸ることの叶はぬがためぞとあり。かへらぬに、都へ歸らぬことゝ、死して再び生き返らぬことを含めたり。○あるものとの歌 子のあくなりしことを忘れて、今も在るものと思ひ、いづこにをるぞと、覺えず其子を問ふことのあるも、悲しきことありといふ意。この二首の歌は、紀氏の歌なり。



◎鹿兒の崎 大津より西南の内海に突出でたる岬の名。大津より船にて浦戸に向ふ途中あり。◎守の  
 はらから 新任の國司の兄弟。◎追ひ来て 館舎のあるところより追ひ來れるあり。◎守の館の人々の  
 云々 新任の國司の館の人々多き中に、このわさく追ひ來りて、別れを惜む人々を、殊更親切心の  
 あるやうに、船中の人々に噂せらるゝとなり。又、心あるを、歌心ある意に釋ける説もあり。言はれは  
 のめくとは、うすく噂せらるゝことなり。◎口網もろもち云々 くちあみといふ網は、本居宣長  
 の説に、今も口網奥網と云ひて、廣さは六七尺ばかり、長さは五六十丈もあるを、遠く海中へ引き延  
 べて魚をとるに、その引上ぐるときに、漁人ども大勢荷ひて運ぶものありと見ゆ。普通いふ地引網の  
 ことなり。もろもちとは、諸持の意にて、大勢の漁人が、其網を荷ひ運ぶをいふ。この處は、漁人が大  
 勢にて重たげに網を荷ひ運ぶが如く、苦しげに、人々の打寄りて一首の歌をよめるを形容したるあり。  
 になひ出せるといふも、この海邊にてと云ふも、共に網の縁語にて、例の滑稽の詞あり。◎をしと思  
 ふの歌 見送の人のよめるあり。別れ惜しと思ふ人の、若しや留ることもあらむかど、かく大勢うち  
 群れて、跡より追ひ來れりとなり。葦鴨は打むれの冠詞。初句のをしに鴛鴦をかけて、三句の葦鴨に  
 應じ、句のあやをなせり。葦鴨は芦の中をどに住めば云へるなり。芦鶴をいふ意と同じ。◎いといた  
 くめでて 前の歌を、紀氏の譽むるあり。いといたくは甚しくの義。◎往く人 紀氏を云ふ。◎棹さ  
 せどの歌 棹をさすも、深さの知られぬ海の如き深き親切を、君に見ることかなとなり。わたつみのは  
 わたつみの如くといふ意。海を「わたつみ」といふ。◎楫取 船頭なり。◎物のあはれも云々 楫取は、  
 別れを惜む人々の心も知らずして、おのれ一人酒を飲み飽きて、満足したれば、早く船出せむとて、

潮時よし、風もよしと云ひつゝ、出船を促すゆゑ、せむ方かく、船に乗らむとすことあり。船に來ら  
 むとすは、前の磯におりての句に應せり。おのれしのし文字は強辭にて、語勢を強むるために用ゐ  
 たり。此あたり、船頭を憎みたる詞づかひあり。いさむは、行かむと云ふにおおじ。◎折ふしに云  
 々 この場合に臨み、漢詩などの、別れの時に相應したるものを歌へりとなり。◎甲斐歌 古  
 今集甲斐歌に「甲斐が根をさやにも見しかけ、れかく横はりふせるさやの中山」甲斐が根を根とし山  
 をし吹く風を人にもがも言づてやらむ」とある歌を云ふ。これも京にある人を懐へる歌にて、別る  
 る折などに歌ふは似つかはしきなり。西の國なれどとは、土佐は京より西なれば、東國の甲斐に反映せ  
 しめたる滑稽あり。◎船やかたの塵も云々 かく歌ふ人々の聲は、船の上の塵を動し、天上の雲を  
 どごむるばかりなりとなり。歌聲美妙にして、梁塵を動し、行雲を過むと云ふ、支那の故事を思ひ合  
 せて書けり。船やかたは、舟上屋と和名抄にあり。

【六一〇】 ◎大湊を追ふ 大湊は香美郡なり。おふは、船をやるを云ふ當時の詞あり。◎はやく  
 の守の子 紀氏より前の國司の子あり。任はて、なほそのそのみは、土佐に留りたる  
 なるべし。◎よき物 肴なり。◎くすし 官醫なり、當時の制、國ごとに、必ず醫師一人をお  
 けり。職員令に、「凡國博士醫師國別各一人」とある是なり。◎ふりはへて わさくの意。  
 ◎屠蘇白散 共に正月元日に用ゐるものなること、今の世もおなじ。◎酒加へて 藥を贈れるのみな  
 らず、酒をさへ添へて贈れり。◎志あるに似たり 願る志のあつきやうなりとなり。似たりと云  
 へるは、あり合せの商買物を贈りしなればならむ。◎元日 承平五年の正月元日なり。◎おあじとま



り 大湊をいふ。◎白散を云々 昨日醫師より贈りくれたる白散を、船中にある者、夜分のことで、鄭軍にも志まひおかず、船のやかたに挿みおきたりしかば、風の吹くまかせて、海にすてたれば、飲むことも能はずかれりとなり。吹きならさせのならさせは、馴れさせの意にて、風の勝手にさすることなり。吹き流させて」とある本もあり。◎芋、あらめ 共に元日に用ゐる食物。◎齒がため 鏡餅をはじめ、それに取りあはせて、元日に用ゐる大根、串柿、鮎などを云ふ。◎かうやう かくやうの音使にて、かゝるものといふも、同じ意なり。◎なき國あり 船中を一の國と見て云へり。元日なれど、元日の食物もなき國なりと、例の滑稽。◎求めしもねかず 用意もなしおかざりしとなり。しは強辭。◎押鮎 鹽におしたる鮎。これも元日に用ゐるものなるが、これのみは用意ありて、人々大勢にて食せりとなり。◎口をのみぞ吸ふ 鮎は口の大なる魚なれば、その口を吸ひつきて食ふさまを滑稽に云へるなり。◎思ふやうあらむや また滑稽に云へり。鮎もし心あらば、何ぞか思はむとなり。◎けふは云々 元日なれば、京の元日の儀式など、さまざま思ひ出づるなり。◎こへの云々 こへは小家の略。元日に身分ひくき小家の門までが、注繩を引きはりて、めでたかるべきさまを想像せり。一本にこへを九重とありて、宮城の門のこととせり。いづれにてもあるべし。◎まりくめ繩 志めなはを云ふ。◎なよし 鮎あり。稱呼否に通ひて、忌はしきより、「名善し」といひ換へたり。今は、赤鯉、海老など吊せど、このころは、鮎のかしらを取りそへて祝ひしなり。◎ひゝら木 柎なり。今も地方によりて、節分の日は、ひゝらぎを門にさすことあり。このころは、船中の人々の、色々と都の元日を語り合ふさまなり。◎もの 贈り物。◎もし波風の云々 このものは、或はといふ意。おなじ大湊に留

まり居るは、波風はげしき故なり。かく波風のはげしくて船出しがたきは、或は、波風の我等を暫しと引き留めて、別を惜むにやとなり。◎心もどなし いつ船出せらるゝことやら待遠しとあり。◎風ふけば云々 今日こそは出立せむと思ひしに、風吹けば、出で立つこと能はずとあり。◎昌連 まさつらごよむ 陸上の人なり。如何なる人か。氏をも云はざるは、身柄卑き人あるべし。◎たいまつる たてまつるの音便。わが事に奉るといふは、例の滑稽なり。◎なほしもえあらで かくものを贈りかゝるゝに、黙しても居られずとあり。あはは、黙の意にて、しは強辭。◎いさゝげわざ せめて聊ばかりの返禮を爲さむと思へど、船中あれば、返禮の品もなしとなり。◎賑はしきやうかれど云々 酒肴かど取り亂して、賑はしきやうかれど、何れも人の馳走のみにして、それらに對し、何か心さびしく負くる心持すとあり。◎どぶらひにく 陸上の人たえず訪問に来るなり。◎きのふの如し 巧に筆を省けりと云ふべし。◎七日にありぬ かく波風のために船出もならず、空しく大湊に船やどりして、此月も七日までに成りぬといふ意。句簡にして、却て風波の苦しさを叙するところ、味深し。◎青馬 正月七日内裡に白馬を進覽するの儀あり、青馬の節會といふ。天皇、豊樂殿に出御し給ひて、白馬を見給ふあり。こは支那の月令などの故事に基かれしものにて、支那にては古き儀式なり。我國にては、大化改新以後の事あるべし。こは年頭の節會として、當時、大に重んぜられしものなり。青馬は青陽の氣を調ふるものなる故に、年頭に見れば、邪氣を遠ざくるかど云へる説より起れるなり。もとは青馬を引きしなれど、後に白馬を引くことゝなりしが、なほ「アヲウマ」と呼びならへり。延喜式には青馬と書けるも、この頃は、はやく白馬となれりと覺し。このところ、白馬の儀式を思ひ出せども、見る



こども叶はねば甲斐あきことなり。馬の白きにあらで、たゞ波の白きをのみ見ると云ひて、滑稽の中に風波の歌まざるをかこてり。○池 地名。○鯉はなくて池といふ名の地あれば、鯉はあるべきやうなれど、それはかくて、鮎以下河魚海魚、さては、他の食物などを贈りくれたりとなり。長櫃に荷ひつづけてと云へば、その贈り物の多かりしを知るべし。○若菜籠に入れて雉など花につけたり 若菜と雉とは、こどもものどある中のものなり。籠は「ヨ」と訓むべし。物を贈るに、花のねなどにつけて贈るは、風流あるわざにて、古の習慣なりき。こゝの花は正月なれば、梅の花などにや。○若菜ぞけふを知らせたる 七日は若菜を摘むべき習なれば、この贈りくれたる若菜は、今日の七日あるを知らせ顔ぞとて、似つかはしきを喜べるなり。前の白馬を思へど甲斐あし句に對映して面白し。○歌あり 贈り主よりの歌なり。○淺茅生の歌 茅の淺く生じたる處を淺茅生と云ふ。淺茅生の野にて池と云へど、水もあき池にて摘みたる若菜なれば、味もいかゞあらむと、謙遜したるなり。野邊にしのしは強辭。○いとをかしかし 歌を許して、おもしろしと云へるなり。かしは、語勢をつよむる助辭。○この池云々 作者が歌に對する註解なり。○よき人云々 都にて身分よろしき女の、夫に従ひて、此國に下りて住めるなり。されば、かく風流なる贈り物をもなせるあり。○わらは 小兒を云ふ。○腹つづみを打ちて 船子どもの馳走に飽きて酔ひれきたるさまあり。○海をさへ云々 鼓腹といふことより滑稽に云ひて、人々の喜び騒ぐには、海をさへ驚かして、忍みおそるゝ波をも立てさすべしと誇張したり。○この間に事多かり 書くべき事多けれど省くと云ふ意。○破籠 今の重箱の如きものなり。和名抄に行旅の具に標子を擧げてワリゴと訓み、「標子中有障之器也」と見えたり。馳走を入

れて贈れるあり。もたせては、奴僕にもたせて共に來れる人を云ふ。○その名かごぞや その人の名を何とか云ひけむ、思ひ出でねど、今考へ出さむとなり。かく云ひて、態ど其名を書かぬは、次に、この人の歌を嘲らむとする用意なり。○この人云々 この人は歌をよまむ下心ありて、こかく物語しつゝ、風波の歌まぬことを憂へなごして、さてよめる歌はとなり。○ゆくさきの歌 君が行くさきの船路に立つ風波の音よりも、こゝに残されつゝ、君を慕ひて泣くわが聲のかた、空さりて高かるべしとあり。○いと大聲なるべし 例の嘲りたる詞なり。○もてきたるものよりは歌は云々 持ち來れる馳走の品よりも、歌は劣れりとの意。いかゞあらむは、ドウダロウといふにおなじ。○あはれがれども云々 この歌を、船中の人々、これかれ、色々に譽めそやせど、一人も返歌するものなし。返歌するほどの歌よみは、船中にあれど、たゞこの歌のみを大層に云ひはやし、その持ち來れる馳走をのみ食ひて、夜も更けたりとなり。いたがりは、大事と譽めそやすこと。まじははれどは、まじり居れど之意。○この歌ぬし云々 人々の返歌せぬにキマリわるくなりて、又參るべしと云ひて、坐を立ちたりとなり。まからずは、「まからんず」と云ふにおなじ。來るべしの意。或人は、未だ退去せずといふ意に解する方穩やかなりと云へり。この歌は、歌の拙きみにあらで、行先に立つ白浪など不吉なることを云ひければ、かく人々に嘲られたるあるべし。○ある人の子のわらはなる云々 わらはは童子なり。ある人は紀比にて、子は紀氏の子なり。まろは我れと云ふことにて、卑下して云ふ詞。紀氏の子の年ゆかぬ童子が、この返歌をせむと云ひ出でたれば、人々もおどろきて、興あることかな、詠まるゝか、詠まるまじ。詠まるゝならば、早く詠みて見せよと云ふに、又參ると云ひて、立ちたる人の、來るを待ち



て、詠まむと云ふ。小兒ながら生意氣に、正式に返歌してみむ心組なるがをかし。さらばとて、かの立ちける人を求めたれど、夜の更けたればにや、直に飯り去りて影もなし。そもく、このやうに詠みたるかど不審がりて問へば、この童子、さやうに云ひしものの、却て耻かしがりて云はず。強ひて問へば、云へる歌は「行く人も云々」とあり。◎ゆく人も、ごまる人も、互に別を惜みて、泣く涙を川にたどへ、さて、それより水際と云ひなして、このあたりに居る人々の袖は、みな、涙にぬれまるとなり。◎かくは云ふものか 小供ながら、此様に詠むものかと、驚きたる詞なり。◎わらは言にて云々 かく面白く詠みたりとは云へ、小供の詠みたるにては甲斐あり。よく出来たれば、翁嬢の歌にすべしとあり。をば強辭。◎あしくもあれ云々 一旦よく聞えたるは、親の慾目ならむも測られねど、假令此歌は、あしくもあれよくもあれ、便りあらば、かの人に返歌せむとて、書きて遺しおかれたる様子ありと、作者の女が、かたへより見たるやうに書けるなり。◎さはる事 波風などの障あるべし。◎業平の歌 古今集雜上に「あかなくにまだきも月のかくる、か山の端にげて入れずもあらなむ」とあり。月を觀て、業平の歌を思ひ出したるが、かの歌を、若し今夜の如く、月を海邊に觀て詠まむには、「浪々」さへて入れずもあらなむ」とよむべきかとなり。業平の歌は、山が逃げて月を入れざるやうにしてくれよとの意なれど、この詠は、波が立ち遮りて月を入れざるやうにしてくれよ」との意なり。さへては支へてなり。

【二一—一五】◎てる月の歌 紀氏の歌なり。月を見れば、海に流るゝやうなるが、海のはてど、天のはてとは、一つになりて、更にその別なきやうなり。さては、天の川の出づる湊は、海にてあ

りけりとなり。これは海と空と一つに見ゆるに、月のくまなくさけて、水にうつれるさまを云へるなり。ざりけるは、「そありける」の約語。とやは「どかや」の意にて、或人と上に云ひたれば覺束なきやうにかきあせるあり。◎つとめて 早朝のこと。◎那波の泊 安藝郡あり。◎國の境の中は云々 土佐の國境の中は見送らむとてあり。その見送にくる人の中に、言實以下の人々は、國司の館を立たれし日より、常に追ひつき來りて、別れを惜むとあり。當時の人情想ふべし。◎これより今は云々 いよく、土佐の國境を過ぎはなれて行くなり。◎海のほとりに云々 海邊にごままりて、船を見送る人のかげも遠くあり、海邊より見れば、船の人も遠く見えずなれりごあり。◎かゝれど 去かしながらといふにひとし。上にかひふしといへるを承けたり。◎ひとりごととして紀氏の、此歌を獨りごととして止みたりとなり。◎思ひやるの歌 海邊にごままれる人を思ひやる我心は、海を渡れども、心は形なきものにて、文をやるにあらざれば、海邊の人々は、我心を知らざるべしとなり。思ひやるは想像する意にて、こゝは、氣晴しといふ意にあらず。しは強辭。◎宇多の松原 香美郡の海邊の地。◎いくそばく云々 松の木の数幾本といふことも知らず、又幾千年経たりとも知れずとなり。◎本ごとに 松の根毎にの意。◎船人 船中の人にて、紀氏のことなれど、おほやうに云へるなり。◎見わたせばの歌 松も千年の榮えを保ち、鶴も千年の齡あり。されば、松の木末毎にすめるは鶴は、その松を千年の友ごちと思へるなるべしとなり。松のうれは松の木末あり。ごちは友なり。べらは様子ごいふ意の辭にて、當時に流行せる詞なり。◎とや 「どかや舟人のよめり」と、作者が傍より見たるふりに書けるなり。◎この歌は云々 この歌は、所の景色に比較して見るに、歌の方おこれりとなり。◎て



けのこご云々 てけは天氣。「ン」の撥音を省く語例數多あり。夜にありて、海の西東も見えずなりたれば、雨とも風とも、空模様のごとは、船頭の心に一任して、海のことになれぬ船中の人々は、何事も知らずとあり。日の暮れはて、海のけしきの心細きを云ふなり。◎をのこも云々 男子すらも、船路の旅行に慣れぬは心細し。まして、女は船底に頭をあて、泣き伏すとあり。婦人の状態をよく悉し得たり。◎かく思へど かく我々は心細く思へど、船頭どもは船歌なごうたひて、何とも思はずとなり。對映面白し。◎春の野にての歌 當時の俗歌なり。千年以前に流行せる俗歌の一斑を知ることを得るは、此日記の賜ならずや。歌の大意は、春の野に我が薄の葉にて、手をきるく泣いて摘みたる若菜なるを、わがおもふ人は食はで、親や姑が貪り食ふらむ。甲斐なきことかなといふ意なり。かへらやは拍子の詞あり。まほるは食ふこと。◎よんべのうなるの歌 同じく俗歌なり。昨夜の童子が來ればよい。錢を催促してやらむ。虚言を云ひて、カケ買に、ただ品ものを持ちゆきて、錢も持ち來らず、又當人も來らずとなり。おぎのりわざは除なり。つんだると云ひ、よんべの云へるは、當時の田舎詞にして、おのづから、田舎人の心情も想像せらるゝなり。これから多かれど書かずとあれば、外にも、此類の俗歌多かりしなるべし。「これなみに多かれど」とある本もあり。◎これらを人の笑ふを聞きて云々 これらの俗歌のひなびたるを、人々の笑ふを聞きて、をかしさに、海は荒るれど、心は浪のをさまれる時の如く、少し穩におちつきたりとなり。荒るれどと云ひ、和ぎぬと云へるは、例の滑稽なり。◎おきな人ひとり云々 老翁一人と老嫗とは、大勢ある乗客の中に、船心持あしくして食物もくはず、弱り居ることなり。たうめは年老たる女の稱なり。こゝは紀氏夫婦を云ふ。ものしたまは

でと敬語を用ゐたるも滑稽なり。ひそまるは響の字にあたりて、憂愁樂まざるの狀なり。◎人みなままだねたれば海のありさまも見えず 人みなまだ眠れる頃に船を出せるければ、海のさまは明かに見えす。月の空に残れるを見て、漸く西東の方角を知る位なりとの意。これは、従者などの未だ寐入りて、戸や苦など開くる事なければ、海の有様の見るに由なきを書けるなり。◎例の事ども 毎朝入りてする事にて、食事などを云ふ。◎今しはねこいふ所に来ぬ 今しのは強辞。はねは安藝郡なる地名。◎ありける女わらは 船中にありける女童なり。紀氏の女。◎まことにやの歌 まことに羽と云ふ地のあるならば、その羽にて飛ぶが如くに、早く都へ上りたしとなり。をさな心見えて面白し。◎なは希望の助辞。やは嘆辞と見るべし。◎また昔の人 前にある土佐にて死にたる紀氏の子なり。◎いづれの時にか忘るゝ かは反語。いづれの時にか忘れ得る。忘れ得ずとなり。◎母 紀氏の妻。◎ふるき歌 古今集の羈旅の部に「北へゆく雁ぞなくなるつれて來し數は足らでぞ飯るべらなる」左註に、男に死なれたる女の旅の道にて詠める由をいへり。くだりし時の人の影足らねは、土佐の國にて死にたるが故なり。今其の事につけて、昔の歌を憶ひ出し打歎くなり。◎世の中の歌 意明かなり。◎と云ひつゝなむ かゝることを云ひての意。なむの下に「船を漕ぎ行く」といふ意の詞を省きたり。◎雨ふらず 降らむけしきをしながら降らざるなり。◎文時、維茂云々 二人は何人なるか審かならず。同じく、土佐を立ちて京に飯る人なるべし。その人の船のおくれたりし地のならし津といふ處より、けふ室津に着きたりとなり。ならし津は安藝郡。◎湯あみ 男女久しぶりに陸に上りて浴みするなり。◎あたりのよろしきところ其邊の便宜なる場所を云ふ。◎おりて行く船よ



り陸におりて行くあり。◎海を見やれば 陸より海を見やればなり。◎雲もみな歌 海も空も、そのはての一つなるを見て、天上の雲までも海の波と見ゆるとなり。あまもがな云々は、漁人が居ればよい、海は何れぞと、空と海との區別を問ひて知るためにとなり。

【一六一〇】◎月面白しの下に、本文「舟に乗初めし日より、舟にはくれなるこくよききぬ着す。それは海の神におちてといひて、何のあしかげにことづけて、はやのつまのいすしあはびを心にもあらぬ脛にもあげて見せける」とあり。解釋不穩のところあるが故に、わざと、本文を省きたり。◎船君 船中の主人公にて、すなはち紀氏を云ふ。◎せちみ 節忌とて、物忌することなり。當時は一箇月の中に八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、三十日には、魚類を食はず、精進して物忌せしものなり。これを六齋日と云へり。◎さうじもの 精進物にて、葷肉以外の食物を云ふ。船中にてよき精進物もなければ、午後より、昨日船頭が釣りたりし鯛を、錢のなき故、米に換へて精進おちせられたりとなり。られぬは、船君と云へるに對する敬語なり。錢をければとあるは滑稽にて、ただ米にて購ひたることを、かく云へるものなるべし。午の時は正午十二時より二時までの間なり。◎くる くれてやること。◎けしきあしからず 機嫌わるからずと、これも滑稽なり。◎あづき粥煮す 正月十五日に、小豆粥煮るは、一般の風俗なりしかり。◎ぐちをし 船路の隙取る事を殘念に思ふなり。この句、「く」文字を衍として、上の句に續けてくちをしと切るべしといへる説もあり。◎猶日のあしければ きのふの雨なほ歇まず、風波も荒きなり。◎あざる 船の進まぬを云ふ。膝行の意。◎廿日あまり 出立以來、廿餘日を海上に經たりなり。◎海をながめつゝぞある 海を見て憂

愁せるさまなり。ながめは、物思しつゝ、諦視するをいふ。◎女のわらは 前の紀氏の女なり。◎たてば立ちの歌 風が立てば立ち、風がさまればさまる。吹く風と立つ浪とは、親しき中の友ならむとなり。ゐるは安坐することなるが、浪の靜まるに譬へたり。又立つと云ふ詞に對して、ゐると云へる詞を案じ出でたるなり。◎いふ甲斐なきもの云々 云ふにも足らぬ小供のよめる歌としては、相應せる歌ありと評せるなり。◎いつしか いつかあり。しは強辭。◎御崎 安藝郡の東南にさし出でたる地にて、最御崎（ハツミサキ）といふ。◎やむべくもあらず やみさうにもなしの意。◎ある人 これも紀氏なるべし。◎霜だにも歌 四國の南の海邊は暖國にして、霜だにもおかぬところなりと云ひならはせども、今見れば、霜どころでなく、浪の中に雪さへ降りると云ひて、風波の荒きさまをよめるあり。白樂天の詩、「南國無霜雪」を下に思ひて詠めるからむ。◎あかつき月夜 夜明方の月なり。◎雲の上も海の底も云々 一天すみわたりに、月かげなどの海にうつりたれば、空も海も一つやうに思はるとなり。◎うべも 尤もチャといふ意の副詞。◎昔の男 古人と云ふ意。支那の漁隱叢話に、「棹穿波底月、船壓水中天」と云へる詩あり。賈島の作なり。この詩を訓讀して、「棹は穿つ云々」とよめるなり。この詩は、今までのあたり見る海の景色にかはらず、よく古人は作りたりと云へるなり。ききざしには、作者は女あれば、詩などのことを云ふは、如何はしと遠慮して、聞きかぢりに覺えたる詩なりと斷れるなり。◎みなぞこにの歌 海底に月がうつれる、その上を漕ぎゆく船の棹にさはるものありは、月の中にありと聞ける桂の枝からむとなり。「棹穿波底月」の意をうつせるあり。月中の桂の事は酉陽雜俎に見えて、月中數百丈の桂樹ありて、吳剛といふ仙人、この枝をおろす由なり。◎かげ見れば



の歌 月のうつれる影を見れば、海の底にある大空を漕ぎ行くことゆゑ、何ごなく、おそろしくつきらき心持がするごなり。久方のは空の冠詞なり。船歴水中天の意をうつしたり。○みふねがへしてむ御船をもこの湊へ引返すべしごなり。○このごまり云々 この湊の景色、遠くより見るも、近くより見るも、面白しごなり。まかしながら、風波のために酔心持くるしければ、十分には其の景色を見ずごなり。こも作者が女になりて云へる詞。○心やりにやあらむ 心を慰むるためにやごなり。心やりは排悶の意。○から歌云々 詩などを歌ふ様子なりといふ意。○いたづらなれば 徒爾なるをいふ。○いそぶりの歌 磯を揺り動すほどの荒浪をいそぶりと云ふ。荒浪の寄する磯邊には、年月をいつごも定めぬ雪のふるごかなごなり。浪を雪にたごへ、雪は冬にふるものなれば、この浪を、いつもく時節の分ちなき雪と喩へたるなり。○この歌云々 この歌は、常にあまり歌をよまぬ人の歌なりの意。こどは「言」にて、即ち歌を云ふ。○風によるの歌 これは浪を花にたごへたる歌あり。風のために打寄せらるゝ荒浪の磯には、鶯も知らず春も知らざる花が咲くとあり。風に波の寄る磯といふべきを倒装したり。○すこしよろし 船の長、即ち紀氏が、前の二首の歌を評せる詞なり。○月をろの苦しき心やり 前月來の船路の苦しみを慰むるためによめるとなり。○立つ波の歌 立つ波を、吹く風に海岸に寄せて、雪か花かど疑はせて、人をだます様子なりと云ふ意。上の「雪のみを降る」「花のみぞ咲く」の二首を一つにして詠めるなり。○人の何かと云ふを この歌を人々の何かと云ひはやすを、また前の二首の歌よめる男がききて、よめるとなり。耽りては、熱心になることにて、前に常せぬ人どあるに對し、俄に熱心になれるやうに書けるなり。○えあらで云々 あまり、句の文字おほければ、聞く

人々こらへ兼てわらへるあり。えあらではえこらへてあらでの意。○歌ぬし云々 その歌のよみぬし、人々のわらふを見て、機嫌わろく笑がほもせず、はなはだ、キマリワロク居るさまなりとなり。○まねべども云々 この歌は文字多くして、人の真似せむと思ふごも、真似のなるものにあらず、又書きまゐるしおきたりごて、讀みがたかるべしごあり。かく云ひて、こゝには其の歌をまゐるさゝるなり。○けふだに云々 今日只今よみたる席にてさへ、かく六かしく讀みにくき歌なれば、ごても後に傳へたりごも、讀まれざるべしごなり。○日あしければ 日よりあしければなり。○心もごなければ 甚だ待遠なればの意。○およびもそこかはれぬべし およびとは指のごごなり。甚だ待遠に思へば、唯日数をのみ指折りて數ふるに、あまり幾日も立ちたれば、指を損すべしご、滑稽に云へるなり。○いもねす いは安眠を云ふ。久しく船を出さざるがづらさに、安眠しても寐すとなり。○山の端もなくて云々 月は山より出でくるものゝやうに、都などにては歌によめど、こゝは山もなければ、海の中より出で來ると云へり。この景色に對して、安倍仲磨の故事を憶ひ出せるなり。仲磨は奈良朝の人なり。靈龜二年に、留學生となりて唐に渡り、後一たび飯らむとせしが難船に遇ひて果さず、遂に彼國に留り、唐朝に仕へて名を朝衡と改め、光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公等に歴進す。わが寶龜十年、病を以て、彼國に歿せしが、彼朝にては滿州大都督を贈り、我朝よりは、從二位を贈られたり。事は續日本紀に審なり。仲磨一たび我國に歸らむとしける時、明州の海邊より船上らむごし、彼國當時の詩人と離別の宴を張りしが、共に彼國の詩を賦して、惜別の懷を遣れり。うまのはなむけは、即ち此時のごごにて、別れがたくやありけむ、深更に及ぶも宴を散せず。「あかずやあり



けむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける」とあるもの、即ち、その折のことを云へるなり。仲麿、月を觀て、諸人に語れるは、我が本國にては、かゝる歌を神代より詠みて、今は貴賤上下、かやうに別れを惜むにも、又喜ばしき事のあるにも、悲しき事のあるにも、そのとき／＼に詠むなりとて、即ち「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」といふ一首を詠めり。この歌、こゝには「天の原」をば、わざと青海原に改めて書けるは、海邊のことに適切ならしめむとて、作者の意を用ゐたるものなり。歌の意は、遙るる大空を見わたせば、二十日の夜の月皎々と上れり。あはれ、かの月は、故國なる大和の春日郡にある、三笠の山を出でし月なるかなと云ひさして、下に望郷の感懐を含めたるものなり。ふりさけ見ればは遠く見渡すこと。ふりは振向などの振にて、接頭語、さけは放、離などいふ意。かもは感嘆の助辞。原とは廣き場所を云ふ詞にて、天の原は大空を云ひ、海原、和田の原等は大海を云ふ。身體の腹も、身體中の廣き場所なれば、然か云ふにて、原と語原を同じうするものなり。

〔二二—二五〕○かの國人云々仲麿、この歌をか國の人々に示すとも、意の通すべくもあらねば、歌の意を彼國の文字に譯して、彼國の譯官に知らせたるに、其意味を悟りけむ、意外に感歎せりとなり。こゝのことは日本語にて、こゝの言葉傳へたる人とは、日本語を知れる彼國の人、即ち譯官を云ふ。仲麿、少より漢土にありて、漢語に通じたるべければ、譯官を用ゐるに及ばざる筈なれど、それらに關せず、まどけなく書做したるものなり。○さて今このかみを云々、その仲麿の當時を、今夜眼前のけしきに思ひ合せて、或人のよめる歌とあり。○都にての歌意明かなり。下句、「海より出て、

海にこそ入れとある本もあり。○卯の時、今の午前六時より八時まで。○みな人々の船、わが船の外に、文時、維茂の船などを云ふ。○秋の木の葉しも、しもは強辭。春の海に對映あり。○おぼろげのわがひ、おぼろげは「おぼろげならぬ」の略語なりと、眞淵云へり。一方ならず祈願せし驗しにやあらむ、風も吹き歌みて、快晴の日出できて、船出するを得たりとなり。○つかはれむとて云々、土佐の國の小童にて、紀氏に従て都に上るものなり。○猶こそ云々の俗語かく御供して來れるもの、猶國の方が戀しさにながめらるゝことかな。それは國にわが父上母上の在りと思へばとなり。かへらやは拍子なれど、こゝのは「歸らむかな」といふ意を兼ねたり。これら當時の俗語を、如何なる調子にて歌ひしものか、知らまほしけれと詮方なし。○くろどり、黒き色の水鳥ならむが、如何なる鳥とも定めがたし。或は鶴のことにもやあらむ。○何さにはなけれど云々、黒と白とを對して云へるは、是といふほどのことにあらねど、珍らしくきこゆ。船頭の詞にしては、身分に似合はぬことゆゑ、耳にとまれるなりとの意。ものいふやうにぞきこゆるは、風流なることを云ふやうに聞ゆとなり。人のほどは、人の身分。○國よりはじめて、土佐の國より上船して以來、今日までといふ意。はじめての下に「今日まで」といふ意を含めたり。○海賊云々、紀氏在任の間に、土佐の海賊どもを、嚴しく戒めしかば、今その坂京に際し、海賊ども、紀氏の船を襲ひ來りて、返報すべきよし、噂頻なれば、日々を案ずる上に、海は風波あらくして、重ね重ね心を痛むること多し。されば、心配のために、船若たる紀氏の頭髪、俄かに白髪になれりとなり。紀氏この頃の齡は、七十歳前後なるべければ、既に白髪の老人となれるを、かく滑稽に歌へるなり。「白髮三千丈、由愁如此長」などいふ唐詩を思ひ合せて書けるなるべし。海賊は藤原純



友などの黨類なりとの説あり。◎七十路八十路は云々 かく白髪になれるを思へば、人間の老といふものは、海の上にあるものなりと、海上の苦痛を云へるものなり。七十路八十路は七十八十を云ふ。此の句簡にして味深し。路は一つ二つのつゝの轉りたる語。◎我が髪之歌 紀氏の歌なり。海上の苦痛によりて、白くなれる我髪と、磯邊に寄する白浪と、何れかまさりて白さぞ、何れかまさりて多きぞ、沖の島守よと、沖の島なる番人に問へるあり。「何れまされる」と云ふが、正格のやうなれど、二さものに斯かる例あれば、又一格と見るべし。◎楫取いへ 此は歌より直に云ひつづけたる短文なり。歌より文を云ひつづけること、源氏物語など、其例多し。前の歌に沖つ島守と歌ひたれど、島守はあらざれば、そこに居る船頭に向ひて、汝をを判断して答へよと命令せるなり。これも例の滑稽。◎夜べのごまりよりことごまりを 夜前の錠泊地より他の錠泊地をの意。餘り、名もなき土地なるべし。◎をのわらは 九つの男の童、年よりも幼稚なりとなり。◎あやしき歌 奇体なる歌をよめりといふ意。◎漕ぎて行くの歌 漕ぎて行く船の中より見れば、船のみならず、山も動くやうに見ゆるを、その山に生ふる松は、山が動くとも知らずやとなり。幼き人の心見えて、をかしき歌なり。あしびきは山の冠詞。◎をさなき童のことにては云々 大人の歌としては價值なきも、小兒の歌としては相應なりとの意。◎海あらけ云々 あらけは浪の荒るゝをいふ。「荒し」の轉語なり。白しの形容詞をしらけを活かすと同じ。雪と云ひ花と云ふ、みな浪の形容なり。◎波とのみの歌 波とばかり一言にいへど、その色を見れば、花にもまがひ、雪にもまがふとなり。◎日てりてくもりぬ 初は晴れて、後に曇れりといふ意。◎海賊のおそり ねそりはおそれの轉語あり。海賊の襲ひくる憂ありと聞きて、

さること無かれかしと、神佛を祈るなり。◎北風悪し この航路には、北風は、やゝ向ひ風なればなり。◎夜なかばなり 夜なか頃といふ意。◎手向する所あり 神に物を奉る所なり。海邊に道祖神又は海神などを祀れる所ありしなるべし 手向は神前に幣帛を奉りて、道中の恙なからむことを祈ること。昔は船路にも陸路にも、この手向のわざあり。◎楫取して云々 楫取に命じて、ぬさを奉らすことに、そのぬさ、東の方へ散れりされば、楫取の祈る詞に、このぬさの散る東の方に、此の御船を速に漕がしめ給へど、祈言を申して、そのぬさを皆奉れりとなり。たいまつらすは「たてまつらす」の音便。御船は、紀氏の船を敬ひて云ふ船頭の詞。さてぬさは幣の字をあて、絹又は布などを、或は大さく、或は小さく切りて、それを袋に入れて携へつゝ、旅行の折に道中の神々に奉り、旅中の無難を祈るに用ゐるものなり。◎あるわらは 或る小兒なり。

【三五—三〇】 ◎わかつみの歌 わたつみは海なり。ちぶりの神は、道觸の神といふ義にて、船路にある神をいふ。ぬさの追風は、ぬさを吹く風なり。今は西より東へ吹く風なれば、その風たえず吹けかし。たえず吹きて、一日も早く都へ上りたしとなり。なむは希望の助辭。◎楫取いたく誇りて云々 船頭、風よきに心傲りて、船子に帆を掲げよなど命じつゝ喜ぶとなり。◎その音 船頭船子の喜び騒ぐ聲をいふ。◎いつしかと思へばにやあらむ いかか都に着かむ、疾く飯京したしと思へばにやあらむとの意。◎淡路のたうめ たうめは老女のこと。下文にある淡路の巨子とある婦人と同じ人なるべし。◎追風の歌 追風の吹く時には、都へ速に飯らるゝこと、手を拍ちて喜ぶほどに嬉しとなり。ほでは拍子のこと。行く船のは、ほ手の序におきたる冠詞にて、ほ手のはに行く船の帆といひかけて、



つゞけたり。◎どぞていけのことにつけていへる、ていけは天氣あり。天氣のよかれかしと祈るにつけて、前の追風の云々といふ歌をよみたりとの意。◎かしこく歎く おそろしく歎息することなり。◎男たちの云々 男どもの、船中のこゝろやりに、「望日長安遠」など朗吟する様子を聞きてとなり。晋書明帝記に、明帝の幼き時に、日と長安と、何れか近きを問ひしに、帝は、人の日邊より來れるを聞きしことなければ、長安の方近しと答へられたり。その後再び問ひしに、仰ぎ見れば、日は直に見ゆれども、長安は見るべからず。されば日の方近しと答へられたりといふことあり。長安は帝都の地なりし事あれば、ミヤコと訓ませたり。この詩句の意を次の歌に詠めるなり。◎日をだにも歌極めて遠き日デサヘモ大空近く見らるゝものを、都へ行かむと思ふ道の遠さよ、目にも見られず、さてもくといふ意なり。あま雲は天雲なり。雨雲の意にあらず。◎吹く風の歌 風の止まぬあひだ即ち波もやまぬ間のみを漕ぎ來れば、この船路は甚だ遠く心細き事かとの意。しは強辭。◎日ひと日終日。◎つまはじきして寝ぬ 爪弾をして寝たりとあり。爪弾は、物を疎みかこつ時にするわざなり。◎よもすがらやます今朝も、昨夜終宵雨ふりて止まず、けさもやますとなり。けさもといひさしたるは「止まず」といふ詞を、上の止まずといふ詞に譲りて省略したるなり。◎うらく 長閑なること。◎長くなりにたる いたるのにはにけるのと同じ助動詞なり。にける、にたる、その意似たり。

◎子の日なればさらす 日本紀纂疏に「凡陰陽家丑日除三手甲一寅日除三足甲一爲吉云々」とありて、當時の俗、子の日には爪を切らざりしあり。◎むつきなれば云々 正月をれば都の子の日のことを思ひ出し、正月の子の日には、野山に出でて小松を引く吉例なれば、小松もあれかしなといへど、海の上な

れば、小松を得ることも難しとあり。◎おぼつかなの歌 うみまつは海松と書きて、「みる」といふ海草なり。歌の意は、けふは子の日か、子の日ならば、松を引くべきに、海の上とて、引くべき松なし。漁人の身にもあらば、せめて海松の名にもなみ、みるにても引くべきを、あはれ興のなきことかなと歎息せるなり。おぼつかなは今日の子の日かにかゝり、果して子の日ならばといふ意。或人いふ、今、土佐の海中に黒珊瑚に似たる物を産す。土俗、海松と云へり。こゝもこの物からむと。◎海にて子の日の歌にてはいかゝあらむ 海にてよめる子の日の歌にては、ドウデアロウ、悪クハアルマイとなり。◎けふなれどの歌 子の日の今日なれど、我漕ぎ渡る浦に、春日野の無ければ、若菜も摘まずとあり。若菜摘む場所なしといふべきを、春日野は奈良にありて、昔の人の若菜を摘みける所なれば、轉義したり。◎土佐のこまり 阿波の國坂野郡撫養郷のうちなり。◎むかし土佐と云ひける所に住みける女 前つ方、土佐といふところに住みたりし女といふ意。こゝは、紀氏自身を女にたとへて云へるなり。◎名たぐひ 同じ名なりとの意◎あなる 「あるなる」の約語。◎あはれ 其以前に住みし土佐を憶ひ出して、覺えず發したる歎息の詞。◎年ころをの歌 年ころをは、長き年月かけての意。單に年ころといふとは較異れり。年來住みなれし土佐の國の名をねへる所なれば、船に寄する浪をも、なつかしく思ひて見るとなり。◎雨風ふかす 吹かすは風の事にのみかゝるなれど、かやうの折は、雨も降らず風も吹かぬ意なり。◎海賊夜ありき云々 たましく事情ありて、この海賊は夜行せざりしと覺し。一般に、當時の海賊を夜行せぬものと心得るはわろし。せざるなりは「せざるなり」の約語。◎みと 今の阿波の鳴門の近邊なり。海水いと早くして、船をやるに危険なれば、一心に神佛を祈りて渡れりとなり。



からくはひたすらなどいふにひとし。○寅卯の時 午前四時より六時までは寅、六時より八時までは卯の時なり。○野島 淡路の三原郡野島なり。○田無川 所さだかならず。和泉の田川にやど北村季吟云へり。○和泉の灘 今の和泉の日根郡の海邊なり。○海賊ものならず 「物にもあらず」の約。和泉の國まで來れる上は、海賊もおそろしからずと、初めて安堵したるなり。○あしたのま 朝の間にて、午前を云ふ。○午の時 正午を云ふ。○黒崎の松原 和泉日根郡の海邊にありと云ふ。○蘇枋 赤き色なり。○五色に云々 五色、必ずゴシキと讀むべし。例の滑稽也。○箱の浦 和泉日根郡にあり。○綱手ひきて行く 船に綱をつけて、汀傳ひに曳き行くなり。○玉くしげの歌 箱の冠辞。玉も櫛も髪飾の具にて、けは入れものを云ふ。此玉と櫛とに對映して下に鏡をねきたり。歌の意は、箱の浦に浪のなき日は、海面一碧、恰も磨ける鏡の如し。誰か鏡の如しと見ざらむとなり。かは反動の助辞なり。○人もいふことにて 人もよむ歌なればとて、自らも氣慰めに歌をよめりごあり。○ひく船の歌 綱手のは綱手の如きの意にて、初句より三句までは、長きと歌はむために置ける序詞なり。長き春の日を、四十日五十日まで、この苦しき船中に費せりと歎じたるなり。さて、上の文に綱手のことあれば、この歌の序は、歌さばなれがたき關係あるものなり。これらの序詞を歌の作法に於て、有心の序と云ふ。○聞く人の云々 この船君のよめる歌を聞く人々の心に、何故に、かゝる平凡なることを歌によむにかど、譏り云ふ様子なりとなり。ただ言は、世の常の平凡なる思想のこと葉を云ふ。○船君のからくして云々 船君のエーヤツと辛苦してひねり出し、自ら好しと思へる歌を、えうまあ無理に悪くはいふまいとて、私語きつゝ止みたりとなり。まへは誣へなり。一本「まひへ」も

あり。強ひ言への意なるべし。○これにつけてよめる歌 これにつけてとは、上句の風波あらしにつけてといふ意。○緒をよりの歌 船中の女など徒然なるまゝに、緒などをよりわたるより思ひつきたる歌なるべし。涙の玉とは涙のことを云ふ。こゝは速に都へ皈られぬ苦しさを叙べて、涙のまげく落つるやうに云ひなし、緒をよられたればとて、甲斐なきものは、その緒を以て、落ちつもの涙の玉をつらぬきとむることの叶はぬことなりとなり。玉と緒とを一首の字眼とし、玉をつらぬきとむることに、涙をさむむることをかけたり。○この楫取は云々かたわなりけり 楫取は天氣を見るが責任なるに、日和も測り得ぬかたわとなり。かたわは片居の義にて、不具者をいふ。轉じて乞食をもいふ。いづれの意にせよ、楫取を罵りたる語なり。

【三二—三五】○昔の人 土佐にてなくなりし紀氏の女なり。このところ、麗しき貝石などを見て、亡兒を憶ひ出したる人情、さもあるべし。○寄する浪の歌 寄せ來る浪よ、この濱の忘れ貝を打ち寄せ呉れよ、亡兒をおもひ出すことを忘るゝために、その貝を船よりおとりて拾はむとなり。忘れ貝は蛤に似て小なる物とぞ。人を忘るといふに忘れ貝をかけたなり。○ある人 紀氏を云ふ。紀氏も悲しみに堪へずして、船中の氣あぐさめによめりとなり。○わすれ貝の歌 前の歌に對し、いな／＼わすれ貝は拾ふまじ。亡兒を戀ひ慕ふ我心をなりとも、せめて亡兒の形見と思はむとなり。白玉は小兒を喩へたり。貝に對して玉をおけるは、此歌のあやなり。○女兒のためには云々 亡くなりし女兒を戀ひしたふためには、親のこゝろも幼きやうになるべしとなり。句簡にして、親たる人の眞情を悉せりと云ふべし。○玉ならずもありけむ云々 白玉にたごへて、歌によみたれど、彼兒は玉のやうに美し



もあらざりしものをと、人は云はむか。されど、昔より、死につる兒の顔は、好かりしなどいふ謔もあれば、おのが子を玉にたとへて云ふも、差支なかるべしとなり。○猶おなじところ 和泉の海岸なり。○手をひでての歌 手をひたしても、寒さを覺えぬ和泉と、泉を國の名の和泉に言ひかけ、さて泉は汲むべきもの、やうなれど、汲むといふこともなくして、空しく日を重ねたりとなり。滑稽なる中に、風波の苦を歌へるなり。○小津のこまり 和泉の和泉郡の海岸に大津村あり。小津も、このあたりにや。はた、おほつの詛れるにや。○松原目もはるなりなり 松原は小津の浦の松原なり。目もはるなりとは、見渡すかぎり松原の遙なるを云ふ。○妹がうむ 緒の枕詞なるを、今は小津の小に緒をかけて續けたり。○船とく漕げ云々 船を早く漕げ、天氣のよければと、船中の人より促すなり。○御船より仰せたふなりあさきたの出で來ぬさきに綱手はやひけ 船頭が船子どもに命令せる詞なり。御船より仰を給ふなり、汝等、朝の北風の吹き出でぬさきに、速に綱手をひけよとあり。朝北は舟乗の使ふ語なるべし。○この詞の云々 此の船頭の詞が歌のやうなるは、船頭の自然に言ひ出せる詞なり。船頭に一意に、我れ歌をよまむといふ心ありて、かゝる詞を言ひ出せるものにはあらず。これを聞ける人の、奇妙に哥のやうなる詞をいふものかなと云ひて、試みに筆をとりて書きとめたるに、まことや、其詞の數、三十字餘をなせりとなり。自然の談話が三十一字の歌をなせるなど、珍らしきことといふべし。うつたへには一向にの意。○いのりくるの歌 祈り來れる驗ありて、やうく風の絶間になれりと思ふものを、生憎に、鷗までも只白き波のやうに見ゆることかかと、波を恨む心より鷗を見て、斯く云へるなり。あやなくは條理の立たぬにいふ。○石津 和泉國大鳥郡にあり。○

住吉のわたり 今の攝津の住吉なり。わたりは住吉の近邊のこと。○今見てぞの歌 住吉の岸の松は年を経たるものと思ひをりしに、今この松を見て、初めて我身の、松よりも年老いたるを知りたりとなり。松の色は若々しく見ゆるに、却て、我は風波の憂目を見たるために、一まは年老いたるやうなりと歎きてよめる歌なり。こは紀氏の歌なるべし。○むかしつ人 昔の人にて、かの亡くありし女兒をさす。つは天つ風のつと同じ連辭。一本「昔しへ人」とあり。○住の江の歌 船子よ、住吉の岸に船をさし寄せよ。その岸にある忘れ草は、果して忘るゝといふ名の如く、亡くありし子のことを忘るゝ驗ありや、ためしに摘みて行くために、船を寄せよとなり。亡兒をおもふ餘りによめるなり。となむの下「よめる」といふ詞を略したり。住の江は住吉の古き名稱なり。忘れ草は萱草なり。上田秋成云ふ、住吉に萱草を詠める事、古くはなし。忘れ貝よりうつりしものならむと。○うつたへに云々 忘れ草摘みて忘れむと歌によめるは、スツバリ忘れ果てむためにはあらずして、餘りに亡兒のことを歎きては苦しさに堪へがたき故に、忘れ草なりとも摘みて、暫く戀ふる心を休め、さて、再び亡兒を思ひ出す時の力にせむためなるべしとなり。これは紀氏の歌を評して云へるものにて、滑稽にあらず。即ち戀しさを一時抑へて、更に大に戀ひ慕はむ用意なるべしと、切なる同情を以て評せる詞なるが、實は紀氏自ら云へるなれば、紀氏が亡兒對する愛戀の情、想ふべし。○ゆくりなく 不意に、偶然になど之意なり。○まりへしぞきに云々 後へ退きに退きて、殆ど船を覆さむとすとなり。○ほどくしく 危殆の意。あぶなく舟を海中にはめ込んで沈めてしまひさうとなり。○例の神ぞかし云々 いつも通りの荒び給ふ神ぞ。何か我らが船の中の品に、神の心に欲しき物おはすらむとなり。○とは今め



くものか。こはは、「と楫取のいふは」この意にて、今めくものかは楫取の詞を評したる作者の詞。今めくとは當世風に似たるといふことにて、物を欲しがり利慾にささき、今の世の人情に似させる神の心かなど、滑稽に云へるなり。◎もはら 專にて、今はモツバラと音便に云ふなり。◎いや吹きにいや立ちに 甚しき風波の立つことを云ふ。古文に例多き副詞法なり。◎ぬさには御心ゆかねば云々 幣を奉りても風波の歌まぬは、神の心の幣ぐらゐるものに満足し給はぬなり。されば船も思ふやうに進まぬなりとの意。心ゆくは心の満足すること。ゆくといふ詞を重ねたるは滑稽なり。◎眼もこそ二つあれ云々 大切なる眼も二つあれど、これはただ一つの外になき最も大切といふべき鏡を、残念ながら、神に奉らむとて、海に投じたりとあり。○打つけに云々 鏡を海に投じれば、海は直に鏡の如く静になれりとは、例の滑稽文なり。打つけには直にの意。◎千早振の歌 千早振は神の冠詞。歌の意は、風波の荒るゝ海に、鏡を投げ入れて、神の心を見たりとなり。鏡に對して、見るといふ詞を用ゐたり。かつは物事のある上に、更に物事を重ねる意味の副詞にて、海に入れたる鏡の外に、神の心をも見たれば、かく云ふあり。◎いたく云々 かやうに物を欲しがりて、人を苦しめ給ふ神は、住の江の忘れ草、岸の姫松など歌によみて、あまり風流なることに云ふべき神にもあらずとなり。いたくは俗語のアマリをいふにひこじ。◎目もうつら／＼ きら／＼と照る鏡の光に、目のまばゆきやうなるを云ふ。こゝには明かにといふ意を兼ねたり。即ち鏡を投げ入れたることによつて、明かに神の怒ぶかき御心を見たりとの意。◎楫取の心は云々 楫取は能く神の物を欲しがり給ふことを察して知りたれば、楫取の心は即ち神の心ありと戯れたるなり。此段風波の苦しきために、神の心までを怨み

かつ譏りて、句々みな滑稽を含めり。味ふべし。◎みをつくし 航路の標識として、水の深淺を測るために立てたる標木にて、難波の津にあるものなること、古歌に多く見えたり。◎難波の津 今の大坂の地にて、津は舟つきをいふ。◎川尻 淀川の末にて、今の川口あたりにやあらむ。◎淡路の島のおほいこ 前に見えたる淡路のたうめのことなり。わざと、島のおほいこ添へて呼べるにて、おほいこは巨い子なり。目下の人にさる敬稱を用ゐて、滑稽を弄したるあり。◎かしらをもたげさせて 船酔なれば、人に頭を擡げさせたるなり。◎いつしかどの歌 いぶせかりこは、氣の結ばるゝをいふ。悒鬱の義なり。蘆こぎそけてとは、蘆の生じたる所をこぎ避けてといふことなり。歌の大意は、いつしかと思ひて待遠に氣掛りなりし難波瀉へ、芦間を分けて御船つきたりとあり。◎いと思ひの外なる人 意外ある人といふ義にて、土佐を立ちて以來、船に酔ひて物も言はざりし人の、ここに着きて初めて歌をよみしかば、斯く云ふなり。◎心地なやむ船君 船中に心ちを煩ひたる船君にて、即ち紀氏を云ふ。巨子の歌を稱歎して、船に酔ひて苦み給ひし御顔のけしきにも似ず、元氣よく歌をよまれたるかちと云へるなり。みかはは御顔なり。かく敬語を用ゐたる、すべて、滑稽なり。

【三六一四〇】◎なやみ煩ふ 船の進まぬを云ふ。◎船君の病者 船君なる病者なり。病者の船君と云はざる筆つき、おもしろし。船酔の爲に衰へたる病者なり。「ビヤウザ」と讀む。◎こち／＼しき人にて云々武骨なる人にて、歌よむことなどは知ぬ人なりとの意。かうやうのことは、かく歌などよむことと云ふ意なり。◎かゝれども云々 歌などよまぬ人かれども、淡路のたうめの歌に感じ、かつは都に近きため心傲りてか、辛くして奇異なる歌を捨り出したりとなり。◎來と來てはの歌 來と來てはとは、來る



うへにも来てはの意。水をあさみとは、水の浅さにといふ意。なづむとは難澁するといふこと。一首の意は、家て見れば、淀川の堀江の水が浅さに船も我身も憫むことかなとなり。我身もと云へるは、船酔の病者なれば、船の憫むに、病に憫むをかけたるなり。これは病をすればよめるなるべしと云へるは、我身もと云へる詞の註釋なり。○ひと歌に事のあかねば 一首の歌にて我心を叙ぶるに足らねばといふ意。○とくと思ふの歌 早く進めかじと祈り思ふ我船を憫ませて、進行を妨ぐるは、我ために水の親切心の浅きなりと、水の浅きを、水の心の浅きやうにかけて云へるなり。○ねたき 残念やと云ふ意。淡路の御の歌に劣れるは残念や。初より歌をよまざりしものをと悔しがりつゝ、奥の方に入りて寝たりとなり。自己の歌を謙遜して、淡路の巨子の歌を褒揚するも滑稽なり。御は婦人の敬稱なり。○鳥飼の御牧 攝津國島下郡にありしなり。御牧は御料の牧場なり。○例の病 持病。○或人あざらかなるもの云々 このあたりの知人、紀氏の此地まで飯れるを聞きて、鮮らかなる物を贈れるなり。即ち魚類なるべし。米してとは、米を以て返禮せしなり。○いひば 飯粒なり。飯粒にて鯛を釣ると云ふ諺、既に此頃より行はれたるなり。○せちみ 前に云へり。○心もごなきに云々 水量の加はるを待つも待遠なれば、夜の明けぬ中より船をひきつゝ、川を上るに、水乏しければ、船は泥沙に膠して進まざるなり。○和田のごまり 攝津島上郡なり。○あかれの所 別れの古言を「アカレ」といふより、今の詞に追分といふ如く、旅人の四方に分散する所の意といひ、或は、贖れの所にて、米魚など賣る店ありし所ならむとも云へり。○渚の院 河内國交野郡にありしなり。○惟喬親王 文徳天皇第一の皇子、天安二年正月廿三日に太宰權帥に任じ、同十一月帥に進み、貞觀十四年出家、十五年

二月廿日に薨じ給ひぬ。即ち小野宮と稱し奉り、業平の慕ひまつりし親王なり。詳しくは伊勢物語の註釋を見るべし。業平の傳も亦。○世の中の歌 古今集に見えたる業平の有名なる歌なり。世の中に櫻の花の咲かすにあらば、春の人の心は長閑なるべしといふ意。そは、花が咲けば、風に雨に心を惱すこと多く、心せわしければ、寧ろ花といふものなからむには、斯かる心配もなかるべしと、深く櫻を愛する餘りによめるものなり。三句、古今集のは「なかりせば」とあり。○興ある人 風流氣のある人と云ふ意。紀氏自身を云ふなり。ごころに似たる歌ごは、塲所に相應したる歌と云ふ意。○千世へたる云々の歌 久しき年月を経たる所の松なれども、昔の通りに、其松を吹く風の音はかはらずと、昔ながらの景色をめでたるなり。聲は風の聲。さむさと云へるは、まだ春の初なれば、斯く云へるなり。○君こひて云々の歌 君は惟喬親王を云ふ。住み給ひし昔の人を戀ひつゝ、幾世を経たるこの渚の院の梅の花は、昔ながらの香に匂へりとなり。前の歌は松をよみ、此歌は梅をよむ。何れも前文に應じたり。○皆人 船中の人々を云ふ。船中の人々、初め京より土佐に下りし時には、子を持たざりし者の、土佐の國にて子を生める者が、此船に在合せたり。其人々、船のごまる所に着けば、各子を抱きて、陸に上りなごす。紀氏の妻之を見て、亡くなりし子の事を、又思ひ出づるなり。○なかりしも云々の歌 初め子のあかりし人も、今は子を携へて、飯る人の子を、我は初めありしに係らず、今はなくて飯るが悲しとなり。○父もこれをきゝていかゝあらむ 作者が紀氏の意中を想像したるやうに書けるものなり。母なる人のよめる此歌をきゝて、父なる人の意中も如何に悲しからむ。斯かる歌は情に迫りてよめるものにて、歌を好めばとてよむにはあらざるべし。漢土にても、我國にても、



詩歌は感情の切なる餘りに成るものと聞けり。此歌も、子を思ふ餘りに肺腑より出でたる真情の語なるべしとなり。◎宇土野 攝津の島上郡にありしと云ふ。◎山の横をれる 山の横はれるを云ふ。八幡の山見え、山崎の橋見ゆ。今は京に入りたる心持して、如何ばかり嬉しかりけむ。八幡は、山城國久世郡にて、男山石清水八幡宮なり。清和天皇の代に宇佐より移し奉りし宗廟の御神。山崎は同國乙訓郡にて、橋は聖武天皇の代に、行基菩薩はじめて架けたり。今の橋本といふ地なり。いづれも淀川の左岸にあり。◎相應寺 山城國乙訓郡にありしなり。◎ごかく定むること 色々ご相談することなり。◎さやれ波の歌 さやれ波はさやら波ごも轉じて、小き波なり。あやは、波紋を衣服の綾に見なせるなり。かげは、水にうつれる柳の影。糸は、柳の枝を糸に見なせるなり。糸しては、糸を以てといふ意。波のあやを、水にうつれる柳のかげの糸を以て織るが如くに見ゆるとなり。◎なほ山崎に「あり」と云ふ詞を省けり。◎車率て來れり 車を持ちて來れりと云ふこと。◎船のむつかしさ 船の窮屈にかつ不潔にして、煩しきを云ふ。◎あるじ 饗應を云ふ。◎うたておもほゆ 禮を盡して饗應せるが、あやしきばかりに思はるゝとなり。

【四一—四四】◎色々にかへりごとす 饗應の返禮をなせるなり。◎家の人の云々 此家の者の行儀正しく禮節あるを云ふ。にくげならずとは、見にくからぬこと。ゐやゝかごは禮儀あること。◎山崎の棚 山崎に物をひさぐ店なり。◎小櫃 張宮の類なり。其の外部にいろいろの繪を書く。小兒の玩具なり。◎まがりの法螺のかた 糧餅の法螺貝のかたちをなせるもの、當時の菓子的一種なり。小櫃も此餅も、共に棚にならべて賣りしものなり。これらのもの、土佐へ行きしときに見たるまゝ

にて、かはることなし。されど、賣る人のこゝろはわろく變ることなきか否や知らずとなり。◎島坂乙訓郡なり。◎必しもあるまじきわびなり 我に必ず饗應せねばならぬ關係の人にあらす。立ちて行く時よりも、飯り來る時に、人は利徳を願ひて、ごやかごもてなすものなりと、人情の輕薄を識るなり。◎夜になして 旅装などの見苦しきを憚り、人目を避けむ爲なるべし。◎いそぎしも しは強辭。◎飛鳥川云々 古今集に「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵はけふの淵となる」といふ歌あるによれる詞なり。桂川は、山城の葛野郡、飛鳥川は、大和の高市郡なり。◎久方の歌 月は月中に生ひたる木なりといふことあるより、月に生ひたる桂川と、川の名に言ひかけて、桂川の序詞にしたるなり。歌の意は、桂川の水も、其水 にくつれる月の影も、昔のまゝにて、かはれることなしとなり。月は序詞にゆづり、ただ影ごのみ云ひて、月かげのことに想像させ、かげもと云ひて、も一字に水もかはらざりけりと云ふ意を想像せさせたり。◎天雲の歌 土佐を立つ時には、天雲のやうに遙に思ひ居りし桂川を、けふは其水に袖をぬらしつゝ、渡るまでになりたることよとなり。桂は月中のものとも云へば、天雲のと云ふ冠詞、いと味あり。ひでては濡らすことなり。◎桂川我心にももの歌 桂川の水は我心と一つのものにあらねども、都に入る我心の嬉しさと、同じ深さに流るゝやうなりとなり。◎歌も餘りぞ多かる 三首も桂川ばかりにてよみたれば、斯く云ふなり。◎いふかひなくぞ云々 なにとも云はむやうなく破損したり。家の荒れたるのみならず、家を預けて、不在中保管せしめたる人の心までが、荒れはてたるなりと、先づ其預けたる人を譏りて、さて其事を詳しく下に云ふなり。◎中垣こそあれ云々 初めこの預れる人は、隣家のものにて、あなたの家とは、中垣の隔あ



るばかりにて、一軒の家のやうなれば、お預り申さむと望みて、親切に云ひたれば預けたるなり。されば土佐にありし中は、謝禮として絶えず便り毎に物をも贈り遣しぬ。然るに預けたる家を断く荒れさせたる今夜のさまは如何にぞやと、皆々、聲高く罵らむとするを、紀氏の、静に制して云はせずとなり。望みてを隣家より見渡しての意に釋ける説もあり。◎いとつらくは見ゆれど、あまり不人情なることと思へども、飯京したることにて、留守中の返禮はする積りなりとの意。◎さて云々、以下數句は、庭園の荒れたるさまなり。◎千年やすぎにけむ云々、松は千年の榮ありて、容易に枯れずとさきくに、五年六年のわが留守中に、其千年は經過したるにや、片枝は無くなれりとなり。◎思ひ出でぬことなく云々、斯く家の荒れたるにつけて、色々昔のことを思ひ出さぬはなく、思ひ出しては、其昔が戀しき中に、取りわけ、この家にて生れたる女の兒の、共に土佐より飯り來ねば、それを思へば、如何ばかり悲しきぞとなり。◎船人も云々、同船せる人々は、皆子を抱きて騒ぐに、といひさして、我子は飯り來らずとの意を含めたり。眞情の文、誰か是を讀みて泣涕せざらむ。◎心まれる人、紀氏夫婦なり。互に亡兒を思ひて、其悲しみを語るなり。◎うまれしもの歌、生れてありし人の子は飯らぬものを、我家に初めなかりし小松のあるを見ては悲しきとなり。小松を我子と對照したるなり。◎見し人の歌、見し人は亡兒のこと。ありし女の兒を、松の千年も榮ゆる如くに見ることが出來たらむには、斯くも遠く悲しく別るゝやうなることは、なかりしならむにとなり。◎忘れがたく云々、亡兒のことを初め、たま〜京に飯りて、家の荒れたるさまなどを見て、いろ〜昔こひしきこと、残念なることなど忘れにくきこと多けれど、こゝに悉くあるすことを得ずとなり。◎とまれかくまれ云々、ともあれ、

かくもあれ、この書きたる物は、速に破り棄てむとなり。そは悲しく堪へがたきことどもを、筆にまかせて書きつけたれば、人に見すべきものにもあらず、速に破り棄つべしと、こゝにわれるなり。







終

5  
2D